
プラタナスの樹に...

霧香 陸徒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プラタナスの樹に…

【Nコード】

N7094D

【作者名】

霧香 陸徒

【あらすじ】

俺の名前は草原竜。高校2年生のただの男だ。とある暴力事件で転校する事になった俺と転勤が重なった家族。新しく住む事になった町。神葉町。俺はそこで不思議な事件に巻き込まれていく……。

プロローグ（前書き）

高校2年になった俺。草原竜は、親友の隆史が怪我をするような暴力を受けてしまった事に頭に血が昇っていた。

そして・・・

ブローグ

「いてこまずぞワレえ！」

「竜さん落ち着いて！」

「なんで止めるんじゃ隆史！？ コイツらお前の…！」

「わかつとります！ わかつとりますからやめといて下さい！
俺なんかの為に竜さんが…！」

「退学や」

「…」

「教師を殴るなどあつてはならん事やぞ？ わかつとるならええんやが。…何か言う事は無いんか？ どうせこれでお前とはお別れやからな。 まあ話ぐらい聞いたるがな」

「…なんもありません。 すいませんでした」

その日俺は高校を退学した。

事の発端は仲の良い友達がリンチに会い、その仇討ちに全員し

ばき倒したって事件があった事からだ。

友達の隆史は俗に言う「不良」だったが心の優しい良いヤツだった。

だから…

そしてその事が学校にばれた。

担任教師は俺に「暴力を振るうヤツは最低の人間や！」と罵った。

そこまではいい。

事もあるうちにその教師は…

「その隆史というヤツちやもどうせしょうもないヤツなんやろ？
そんなんで暴力振るうてどうすんね」

最後まで言わせるつもりは無かった。

気が付くと全力で教師の顔面を殴りつけていた。

何度も殴りつけていると当の隆史が止めに入ってきた。

だか、止まらなかった。

それだけの話だ。

「竜。引つ越すで」

丁度父親の転勤が重なった。母の故郷がある町へ引つ越すそうだ。

学校にも居られないので丁度良かったが、一応母から「今度同じ事したら教育的指導」と釘を刺される。

母の指導は…そこらの暴走族チーム一つより暴力的で実戦的で…要するに痛い。

俺と両親の三人は、関西の地から反対の関東の地へと向かう。

そんな道中の車の中で、俺は夢を見た。

時は3月の下旬

春はもうすぐそこまで来ていた。

草原 竜の章 第1話 樹の下の少女（前書き）

暴力事件で転校してきた俺。

新しい町では何があるのか少し気分が高揚していた。

草原 竜の章 第1話 樹の下の少女

時間軸不明

[illegible]

モノクロの空間の中で、俺はただ立っていた。いや、地面の感触は無いので少し浮いているのかも知れない。

何処かの公園のようで、大きな木が囲むように生えていて薄暗い。モノクロ調ではほとんど見えないのと大差が無かった。

その中で丁度木々の隙間から光が漏れるのを狙つたように生える一本の木を見つける。

「行くわ。またな……」

そう誰かが呟いたのが間近で聞こえた。しかし、暗くて見えないし、気配も感じなかった。

「私の……をよろしく……さん」

今度もまた違った場所から聞こえてきた。始めの方は若い男のもので、後の方は女性としか分からない感じの声色だった。女性では

無いのかもしれないが、やはり見えなかった。

……そして目が覚めた……

4月3日(日) AM 10・25

草原家新居付近

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

朝霧もそろそろ消えようという頃、涼しげな空気をバリアで弾くように汗だくの男が二人白いワゴン車を押していた。

「まだかい……」

一人が呟いた。もう一人は黙つたままである。

「おっさん何か言わんかいっ！誰のせいやと思っとなねん！」

と、罵声をあげているのが草原竜。16歳の高校2年になっただけ、少し目付きが悪いだけの青年である。

その隣で死にそうになりながら無言で車を押しているのは彼の父だった。だが家庭内の地位は底辺に位置する。

「もう少し…で…あの青い屋根のトコまで…」

そうして車を押して数分後…

「はぁ…。やつつつつと着いたでえ………」

あからさまに肩で息をしながら、力無くそう言つと、竜は嘆息した。横を見ると完全に衰弱してる父。

「もうちよつと前に押さな道の邪魔になるやろ！竜…」

「さ…さよか…」

ショートカットの前髪がぐつしよりと濡れているのに顔をしかめて弱々しく呟いた。ところで今まで関西地方に住んでいたのが当然の如く関西弁を喋る。父も同じだ。

竜はその関西の学校を退学になってしまったので編入するためにここに越してきた。竜達が立っている街。神葉町へと…。

そして、新居へ車でやって来たのだが…。

「しつかし、なんで壊れたんやこのポンコツ…はっ！はっ！はぁあ
あぁあいつつ…！」

その言葉と共に目の前の車をガンガンと蹴る。振動に揺られて悲鳴を上げる車と父。

「ああ！？まだローン1年残つとんのに！」

「まあ、あなたの安月給じゃ仕方無いけどね…」

車の中から厳しい声が聞こえて来た。中に乗っているのは竜の母親。^{クサハラ}草原 ^{ミキ}美樹だった。ちなみにまだ35なので若い。

しかし、実際の年齢より10程若く見える程プロポーションも衰えてなく、なにより、童顔だったので年と共に艶が増した程だ。

それと、先程から情けない声を上げている竜の父。^{クサハラ}草原 ^{ソウカ}蒼風。
印刷会社に務める35歳。

と。三人がこの街に来たのには理由がある。

竜は編入。父は仕事場の転勤。母は里帰り。偶然にも一致して新たな新居を構えて引越して来たのだ。

竜は編入が決まった時に一人暮らしを主張したが、見事に却下された。

「どこでもいいけど、着いたんやから、はよ降りろや!」

いつまでも車内にいる母に、竜はイライラしながら怒声を浴びせるが…。

「疲れるからまだ降りない。それにまだ着いてないでしょ?車を隅に寄せないと駄目なんだから…」

…と、揚げ足を取られる。……というか、思いつきり屁理屈わがまま だが……。

竜は黙ってそれに従った。

仕方無い。

仕方無いのだ！

降りないと言っていた母が、車を降りて自分の息子に微笑んでい
る。

そこまでは良い。

母の両手と右足が心持下がっていて、左足に重芯乗せているのが
見えたのだ。

そう。

戦闘態勢である。

例にあげるなら、この体勢から有無を言わず神速のワンツー、
ローキックで体勢を崩して、逆足で踵落とし。グロッキー状態に
なった所をラッシュで急所狙いを決めてくるだろう。重いストレ
ートや鋭い肘を食らって五体満足では済まない。

「はあ……」

ズタボロの自分を想像してかぶり振り、再び車を押しにかかった。

草原家新居内

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

二階建てで、庭がある。「サラリーマンの夢」的な家を35歳の若さで建てたんや。車が安物になって仕方が無いやろ？」と、父が言っているのを無視して部屋をグルッと見て回った。一階に畳とフローリングの部屋が2つつづ。それぞれに荷物を置き、ぐたぐたと、するのは年寄りだけだ。

母が何か言っている。それを無視して愛用の黒ブーツを履いて外に出ることにした。

AM 11:20 神葉町町内

[illegible]

「はあ、なんか、べっつに変わり映えせえへんな？ 家もちよこちよこあるし、コンビニもすぐ近くにあったし…。後は…新しい学び舎でも見にいこか」

そう言つと竜は頭の中に先程コンビニで見て来た地図を展開した。

（確か近くに商店街があつたよおな…）

5分後…

「あつた！公園！………つて！違うやん！ベタベタなお約束かいっ！」

（どこをどう間違えて公園なんや！）

その答えは自分の深層心理にしか無い事を悟りポケモードを終了する。

そこには、商店街どころか自動販売機も無かつた。桜の木（梅かもしれない）の花が咲き乱れ、決して狭くない公園がある。公園と言つても、ブランコやベンチぐらいしかない。いわゆる自然公園タイプだ。

「……………。都会のなかで、数少ない自然を守ろう！……………運動？坂倉市・神葉町自然保護委員会……………。賞金三十万円……………つて！？はあ！？さんじゅうまん てなんや！？し…しかも 何したら貰えんのか書いてないやん！アホかこの町何考えてんねん…」

公園の前にあつた看板を見ながら竜は呟い…いや、叫んでしまつ

た。看板の汚れ具合から見て、一年以上前からそこにあるのは明らかだった。しかし、その賞金に心惹かれるものがあるが、訳が分からないのでどうしようもない。

自然保護の看板（？）は丁度公園の正面にあるが、その後ろの公園はまだ昼前にもかかわらず鬱蒼と茂った木々の葉に、陽光を遮断され闇を落としていた。

桜の木　桜ともはや決め付けた　のある手前側は、そこまで言わないが、奥は冗談抜きで真っ暗だ。

「えっ？」

竜は目を疑った。

別に昼間に真っ暗だった公園に訝ったわけではない。

それは公園の中央にある、他と隔離された木……でもなく、その側に佇んでいる一つの人影だった。

その人影は、公園の隔離された木を見上げているだけだったのだが……。妙に気になって、竜は公園に足を踏み入れた。

ドサッ

……と踏み入れた足の下にスイッチがあるが如く……そんなタイミングで人影は倒れた。

竜は驚き足を早めて人影に駆け寄ると、すぐに抱き起こした。

「大丈夫……ですか……えっと、お……お嬢さん」

抱き上げてみて気づいたが女の子のようだ。長い髪が1・2割程度だけ三つ綱にして垂らしたような変な髪形だった。まだ若く、自分と同じかそれ以下に見える。とりあえず介抱しながら慣れない標準語で話す。女の子は目を閉じたままで、気を失っている。

ぺちぺち……。

軽く頬を叩いてみる。

「う……………ん……」

妙に色っぽい声でうめく女の子。叩かれた事に反応したが、目を覚まさない。……というより、目を開けるのを拒んでいるようにも見えた。もしかすると、それほど衰弱しているのかもしれない。

実際、体が小刻みに震えていた。

（もしかして、危険な状態なんか！？）

「おいっ！　おいっ！　大丈夫かあっ！　しっかりせーやっ！」

力の限り揺さぶって、叫ぶ！

「あ……あう……」

そうされて女の子は情けない声を上げる。少し涙目にさえなっているようだ。何にしろ女の子は目を開けて、フラフラと立ち上がると、口のへの字にして非難の声を向けてきた。

「むうっ……。耳元で叫ばないでよぉっ……」

「あ……ゴメン……」

咄嗟に謝ってしまったが、自分に非はないと竜は思う。

そんな事よりも、以外に元気な女の子に疑問を感じ、竜は首をか
しげた。

「……って、大丈夫なんか？いきなり倒れたんやで？……なんともな
いんか？」

「ふにゆう？」

「いや……ふにゆうじゃなくて……。分かった……。なら、なんで倒
れたんや？どつか悪いんか？」

女の子はフルフルと首を横に振る。そうすると長い髪も一緒に動
いて首に絡まりそうだったが。そして頭を掻きながら「えへへ」と
顔を赤くしながら一言だけ言った。

「あのね、お腹すいて動けなかったの」

「行き倒れか、おいっ」

とてもしょ～もない理由についツツコミを絶妙のタイミングで入
れてしまう。何も無い空間にだ。

「良くある事だよね」

「ここはスラム街か」

そう思うと納得したので、もはやこの場に居る理由はない。竜は意味不明に微笑んでいる女の子を視界に入れないようにして半歩下がった。

「ほな頑張れや」

出来るだけ冷たく聞こえないようにゆっくりと言いながら竜は公園を出る為に、先程下げた片足をバネに駆け出す。前に女の子の姿が無い事に気が付いた。

「…えっ……」

急いで辺りを見渡すが何処にも人影は無い。竜が目を見たのは数秒程度なので走って隠れる事も出来なかった。第一足音を聞いていない。

（白昼夢？？　なんか変な感じしたから早めに退散しよう思ったのに…。悪霊ちゃうやろな…）

公園が薄暗い事が災いし、怖い事を考えてしまう。

竜は少し息苦しさを感じてきた。この世に存在しない者を見たのはもちろん初めてだったが「見たのは」で、「感じた」事は何度かあった。だから取り乱す事も無かったし、冷静に行動したつもりだった。しかし

（常識通じる相手や無い…）

ざわざわと広葉樹が風に葉を揺らしている。それを眺めながら、自分の心も揺れているのを代わりに表現してくれているようだった。思った。

「まあ一般論で言ったら…」

言って握り拳を固めながら

「可愛い子〴〵が幽霊になったら勿体ないやんっ！」

そして中指を立てる。無論、その相手は誰も居ない。さしずめ運命の神様にだろう。

「一般論違っっ！」

「……を？」

一人ボケツツコミをしたわけでは無い。

真正面に先程消えたハズの娘が立っていた。 ちなみに膝から下が無いわけでは無い。

しかし、不気味に笑ってはいる。

「ねえ〴〵君ってさあ〴〵面白いね」

何が面白いのか笑いを堪えるように片手で口許を押さえて笑う彼女。

「ゆ…幽霊に面白い言われたら敵わんわ…」

「幽霊？」

彼女は言われてキョロキョロと回りを見渡してから急に背後を振り返った。そしてもう一度向き直った時には眉根をひそめて自分を指差した。

「……………私の事？」

竜は無言で頷いた。

頭のテンプルにハンドボール大の汗を抱えたまま彼女の眉がバルサミコを間違えて使ったイチゴのタルトを食べた様にひん曲がった。分かりにくいなら塩分20%の梅干しでも良い。

「はあ？」

その声が漏れる前に予想出来たがやはり実際に聞くと恥ずかしい物である。

「と…急に消えたやん」

「消えた…？んと、座ってたけど…。あ！それが消えたって事？あははあゝ うけるゝ」

「は？」

解答『疲れててしゃがんだ気配も読めず、そこには居ないという固定概念があった』というわけだ。

とても面白みのない話だ。

「あはははは……う……笑ったらまたお腹がすいてきたのらあ……」

「忙しいやっちな……」

またも倒れそうになったのを支えてやりながら、今更ながら彼女の服装が気がついた。白の清潔そうなシャツにチェックのスカート。どこかの制服なのかもしれない。……が上着が無い。

「なんや君上着どないしたん？」

いつの間にか関西弁に戻っている。

それを特に気にしないようなので安心した。関東人は関西弁に嫌な気になる事もあるからだ。

もちろん竜の偏見である

「おなかすいたあ」

「答えになつてへん」

まったく話を聞いてないようだ。

「おなかすいたああ」

連呼する程らしい。

「君、何年生やねん」

「んと。一年生だよお」

小学？と聞き返したかったがどう見ても外見は中学生以上に見える。背は低いが……発育は良い。

「？」

我知らず上から下まで穴が空くほど見ていたらしく彼女は少し身を堅くしながら睨んでくる。

「あ、いや。しゃあないなあゝなんか奢ったるわ」

『見物料として』という言葉を読み込んだり。

「わあ 優しいゝ私の目に狂いは無かったよお」

「確信犯の台詞やソレ……」

町中で、自分より若そうな女の子が行き倒れている事に、再び疑いたくなる。

「それじゃいこゝ あ、おべんとでよいよおゝ」

こちらの呟きを聞いていなかったのか聞いてない振りをしたのか分からないが明るく腕を掴んで来た。

「私の名前は森川千穂モリカワ チホゝ貴方は？」

「え？」

「え？じゃないよー！自己紹介い！まだ名前聞いてないもん」

「あ…あぁ…」

名前を言う程付き合うつもりが無かったので完全にソレが頭に無かった竜は自分に苦笑しながら大きく息を吸い込んだ。それを吐くと共に名乗る。

「俺は草原竜。ソウゲンと書いてクサハラ。ヨロ」

何がよろしくなのかその時は分からなかったが、その一言がこれからこの事件の始まりを予感していたのかもしれない。

草原 竜の章 第2話 家族

守矢公園と書かれた石柱が入口にあるのを発見した。
何せイキナリ人が倒れたのでしつかりと見ていなかった。

「この公園はね。後ろに山への道があるんだよ」

千穂は簡単に説明してから公園を見つめている。

「ふん」

適当に頷いて竜も見るが、もう少し離れて見ないと山があるかどうか
も鬱蒼と茂った木に邪魔されて見えない。

「よくわからへんな…。あ、そっぴやアంత何でこんなトコ居た
んや？」

「むうゝ！「アంత」なんて名前じゃないよゝ。さっき名乗った
ばかりでしょゝ」

「ん…。あゝじゃ森川さん。なんでこん」

「ぶゝ！」

「……」

どうやら初対面でファーストネームをお望みらしい。

「ほな、千穂ちゃん」

「はあゝい」

呼ばれた途端に明るく手まで上げてくる。

「……じゃ、話戻すと…なんでこんなトコ居たんや？」

「あ…えと…」

千穂はそれを聞くと笑顔を消してしまった。何かを考えるように目を閉じるとゆっくり竜の袖を掴んだ。

「？」

強く握って数秒。そして離れた。

「はやく行こ…」

次に発したのはこちらの質問の解答とは違う言葉だった。何かから逃げる様に引っ張ってくる。

そこへ一人の少女が走って来た。付近の学生だろうか？

学生服に身を包んだ、自分と同じぐらいの感じの少女が、今出てきた公園に走りこむのが見えた。

その横顔に見覚えは無いが、何か引っ掛かった。ショートヘアの元気そうな少女だったが…

「泣いて…？」

その竜の言葉に反応して弾かれた様に、千穂は公園の方を見やる。

「また…来たんだ…」

「え？」

「ううん。行こう」

千穂の呟きに聞き返すが、静かに首を振り公園から離れていく。

「どないしたんや？ あの子知り合いか？」

「いいから！」

強くそう言う彼女の目にも涙が浮かんでいる。

「…さよか」

何か事情がありそうだが、本人が話したく無いようなのでこれ以上は聞かない事にした。

正直、これ以上泣かれても困る。

竜と千穂の2人はそのままその場を後にした。

草原家

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

靴を適当に脱いでキッチンへ行こうとし、ふと気が付いて玄関に戻ってくる。

適当に縦や横に向いた靴を揃えて置く。こうしておかないと、後でこの靴が頭に直撃する事になる。

竜の靴は軍隊で使われるような堅い鉄板入りの安全靴だ。それを履いて踵を頭に落とされると致命傷にもなりかねない。

ついででは無いが、玄関に立つたまま待っている者に声をかける。

26

千穂はおどおどしながらそろっと靴を脱ぎ、竜と同じように揃えてから上がる。

「どないしたんや？ 別にそのへんから蛇とか虎とか出てこうへんで？」

「いや、そうじゃなくて…あの…家の人は？」

入ってすぐの柱に隠れてキョロキョロと見渡している。

「家の人？ ああ、両親か？ん」

パタパタと部屋を覗いてきて、すぐ戻る。その間に千穂は少しも移動していない。

「おらんみたいやな。どこ行ったんやろ？ あ、ちなみに兄弟おらんからな。一人っ子やから…」

「いや…だから…そうじゃなくってね…」

「なんや違うんか？ ええと親父は怖い人ちゃうで？ おかんは…怖い人かもしれへん…」

「あ…」

「あら？これも違うんか？ 別に勝手に上がったかて何も言われへんで？」

「ああんもう！だ・か・ら！」

「あつ、何!？」

喋りながら考え込んでいた所に、大声を上げられて少し驚いた。

「きょうよりい、あすよりい、ああいがっほおしい」

「なに？」

「う……うん。なんでも無いよ。気にしたら負けだよ（愛より愛する君が欲しい）全てが」

光の中で揺れてる、お前の微笑み。足音だけを残して闇に消えるシルエット。満たされ羽ばたき、女神が背中向けて今。

と頭の中で一通り謎な歌ってみる千穂だった。

誰にも理解されないようなネタはやめた方が良くと天の声が聞こえたような気がした。

「あのさあ……。誰も居ないんだよね。家に……」

「んん?…ああつ！親父達どつかいったみたいやな」

変モードからいきなり脱したので、ちょっとついていけなくなってしまった。

「あの…、年頃の男女2人が同じ屋根の下で2人つきりってちょっといけないとおもっの！」

でね、出来ればそのおじさん達が帰ってくるの待って……ってちょっと

と！ 近づいてくるなんて反則だよ！…きゃ！」

ポクッ

「きゅみや！？」

「俺はそんな変態やない！ とゆうか飛躍しすぎ！」

手加減してチョップをかます。それを受けて「あっちの世界」へ行っていた千穂が現世に戻ってきたようだ。

叩かれた頭を押さえて「あれね？」と？マークを浮かべている。

「はあ…。やっぱ変やわこの娘…」

竜が溜め息をつきながら眉間を押さえて力無く呟いているのに、千穂は「どうしたの？」と聞いてくる。

確かに自分も常識人とは言えないかもしれないが、ここまで根本的に変ではない。

はずだ 初めは「女の子に出会えてラッキー」程度しか思っていないかったが、今思うと後悔し出してきた。

「何か頭痛そうだね？ 風邪？だめだよお気をつけないと」

その頭痛の原因が何か言っている。

あんたの事で痛いんじゃない！…とは流石に言えなくてバレない程度の作り笑いを優しく声を出す。

「いや、何も無いよ。ほら、こっちやで」

後で考えるとこの声は震えていたかもしれない。何にしろ、気付いて無いようでニコニコとしながら後をついてきた。

「はぁ……」

本日二度目の溜め息をついて、竜は台所に足を運んだ。

家族の顔が見れるキッチン。広いテーブル。

綺麗に並べられた調理器具は雪平鍋や中華鍋、圧力鍋にフライパン……

一見して一式揃っているのが分かるが、一般家庭のそれよりは少し多いような気がする。

フライパンだけでも5つある。

炒め物用、卵焼き用、和え物用……後は竜には分からなかった。何にせよ、良く洗ってもフライパン一つでも臭いが移るらしいので母は絶対それを雑には使わせてくれなかった。だから竜自身のフライパンがあったりする。

「えーと、人参にピーマン、玉葱に……豚肉は……切り落とし？まあベーコンにするか……ホールトマトは何処にあるんや？……ケツチャブだけでええかこの際……うーむ……」

ざっと見て適当に材料があるので後は竜の腕次第となった。その辺のコンビニで買ってくれば済むのだが折角だから火の通った物にしたかったのだ。

「あら？ゴマ油切れとんの？ ええわっ、なんとかなるし！ 後は

…」

「あの〜」

「ああ、すぐ済むから…」

それだけ言って後ろからの声を無視してまた冷蔵庫を漁る。

「あのお〜…」

「なんや？」

再度、後ろから声が掛かって煩そうに振り向く。

「今から作るの？」

「そやで？」

そう千穂に言つと、また採集作業に戻ろうとすると、千穂は竜の肩を掴んでぐらぐら揺らしてきた。

「ちょ…ちょっとお！」

「なにい？　いらへんの？」

再三作業を止められて恨めしそうに竜は振り返ると、千穂はそれより恨めしそうに見つめ返してくる。

「そんなの待ってられないよお！限界来てるんだよお〜！何かすぐに食べれる物無いの？」

「すぐに食えるもん？ んー、チキンピラフがあるけど……？何時のやる？今日行ってる間やと思うけど……」

「そ…それでいいよっ！ 十二分だよ！」

「そおか。これと、これと…これっ…」

チキンピラフが入ったカレー皿を持って、そのまま調理場に向かう。千穂が言ってる事は完全に無視している。

「あっ！ そのままでいいよお！？ 今日作っただよね？」

「そんなわけあるかい。そのままやったら冷えて腹壊すで？ 一応さつと火ぐらい通さなな。えーと…」

電子レンジという選択肢は頭に浮かばない。

自分局のフライパンに火を掛けて、調理油では無くバターを一欠入れて延ばす。油はあらかじめ少し塗ってあるので少量でも大丈夫そうだったが、甘味を少し出す為だ。

「よっ…と！」

そこにさっき持ってきたチキンピラフを入れて、適当にひっくり返したりして炒める。

そこまで見て千穂は驚いていた。慣れているので、こぼしたりはしなかったのだが、そこで驚かれるのは竜にとって心外だった。

炒め終わったピラフをカレー皿に戻し、今度はそこに溶いた卵を流し込む。ただ、その時間はほんの数秒だ。

表面がほぼ半熟の状態でピラフの上にのせて、それを指で左右に広げる。そこから半熟の卵が流れ出した。

「オムライス出来上がり」 はいお食べー・・・ぷっ」

そう言いながら、コンと千穂の前に出してやる。まるで子犬に餌をやっている気分になってしまつて竜は吹き出してしまった。

「うわああ…美味しそう」

テーブルの椅子に座り何処から持ってきたのかスプーンを構えて既に戦闘態勢だった。征服するのは目の前のオムライス。

「そんなん…、出来てんのを卵被せただけやん！　だ…誰でも出来るわっ！」

「そんな事ないよお。ほら、これってバターで炒めたんだよね？　卵もこんな感じに半熟なのつてくりーみいだよお　ああっ！？　チーズ入ってる？」

言われて恥かしくなつてしまう竜。

「そのまま出すんもアレやし…」

もそもそと肯定してしまうが、それを聞いているのか千穂は一心不乱に目の前の敵を攻撃し続けた。既に敵は数秒で半分を食い尽くされている。

「ほ…ほんまやったらもつと美味しいもん作つたつたのになあ」

「いい奥さんになるよぉ〜お嫁に来てえ〜」

喋りながらもその食欲が収まらない千穂を見ながら余計に恥かしくなってしまうた。が、とりあえず義務を果たしたので話を切り替えることにした。

「なあ、食べながらでええけど聞いてええか？　なんで、あんな所に倒れてたんか……」

「おいしい〜　くそぉ〜ホントにちゃんと待ってれば良かったかなあ〜　どんなのが出てきたのかなあ〜」

「聞いとる？」

目の前に乗り出して見上げ、竜は苦笑する。そうされて千穂は冷や汗のようなものを浮かべ、スプーンを動かす手を止めた。そして観念したような素振りを見せて一言だけ言った。

「孤児になったの」

その一言で、辺りの時間が止まる。

「ただいま！」

その声で2人共びくつと身震いして時間を再度動くのを認めた。声からして母だと竜には分かった。トントンと軽い足取りで近づいてきて、台所に顔を出した。

「あっ！竜帰ってたんなら「おかえり」の一言も……あらお客さん

？ いらっしやい…ってあなた！？」

「え…どういっ…」

母と千穂が煮たような表情で驚愕しながら指を差し合っている。

「なんや知り合いなんか？ おかん？ ……おかん！」

放心したように自分の息子の声が届いて居なかった。それでも千穂を見る目を離さずに、そして千穂も同じように見つめ返している。

「ええっ！ 何を……ちよつとあなた来てっ！」

そう言つと千穂を引つ張つて台所から出て行く。

「え……ちよ…」

「あなたはそこで正座っ！！」

「ハイッ！！」

一喝されて、素直に床に正座してしまう。それを見て満足したように笑い、母はそのまま出て行った。

………

………

………

条件反射とは言え忠実に座っている自分を、他人事の様に見つめ

る自分がいる。

生理的にも物理的にも母親には逆らえないのだが、ここまで来ると息子というよりペットに近いのでは無いかと思えて来てしまう。

そんな卑屈さに呆れてしまいが、そろそろ立ち上がろうかとした時、千穂と母が戻ってきた。

「よろしい。ちゃんと「待て」出来たわね」

「俺や犬かい！」

前言撤回。「ペットに近い」では無く「ペット」らしい。

「ふふふ、やつぱりおもしろい」

千穂が気楽な感じで笑っている。そういえば、先程までの暗い表情は、欠片も見当たらなかった。母と何か話をしたのだろうか？

「あのね、私、この家の人間になったから」

「はい！？」

「養子として向かえるのよ」

二人が冗談を言っているようには見えない。

冗談を言ってる時のような楽しそうな感じでは無く、「嬉しそう」な顔をしていたからだ。母は少しだけ苦笑しているようにも見えたが。

4月4日(月) AM 7:01
草原家・竜の部屋

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

ピピピピピピ…カチャ

「あほか…」

まだ虚ろな目を擦りながら目覚ましを止めて、置きぬけにそう呟いた。

「殴り殺しとって何が「好き」やねん。こいつ死んだほうがええで」
今見た「夢」を思い出して気分が悪くなった。朝の清々しい空気を吸う為に窓を開ける。

外は寒そうな風が吹いていてすぐに、閉めたがその新鮮な空気を腹一杯に吸い込み、なんとか気分は収まりそうだった。

竜はこういう悪夢をたまに見るが、その内容を忘れずに覚えていく。

妙にリアルで一時期「予知夢」かと思ったが、竜自身にこういう体験は無いし、しようとも思わなかった。

どう考えても気持ち悪い狂った男だったので他人だとは思って、

新しい学校……俺の新しい場所。もう、俺はここ以外の場所では存在できない……。前の学校に残してきた親友達……。

「アイツ元気にしとるかな・・・」

退学の原因になった友人を思い出す。最後に別れる時、しきりに謝ってきたが、自分が思った通りに行動しただけだったので後悔も無かった。

だから、いや、それでもこの遠く離れた地で遠い昔のように懐かしく思い出していた。

もうあの頃には戻れない。しかし、後に戻るつもりは無い。もう振り返らないと誓ったのだ。……そう…振り返らないと…。

振り返らない事……それはよく言えば勇気を降り絞る事。悪く言えば……逃げているだけだ。

「そつや！ 振り返らないと誓ったんや！ 俺はっ！」

「あの～……」

後から声がかかる。

だが、竜は振り返らずに虚空を見上げるだけだった。

「ねえ……」

再び声が聞こえる。先ほどと同じ声だ。しかし、振り返る事はしない。

「振り返る言う事が、今までの失敗やったんや！俺は振り返らへんぞおおっ！」

「おにいちやあああんっ！」

「やかましいいいっ！」

再三声がかかり、あまりに煩いのでつい振り返ってしまった。人の決意など脆いという事を証明してしまったようで苛立ってしまう。そこには千穂がいた。相手をしてくれなかったので少しふくれ顔で。

千穂も自分と同じ様に制服を着ているが、学ランの竜に対して、千穂は黄色いセーラーだった。出会った時の服はこの学校の制服では無かったようだ。

「もうゝなんでムシするのよおゝ？しかも、なんかブツブツ言ってるし…。私、何かした！？」

「あああああっっ！！」

竜は頭を抱えて大きく仰け反った。

「やかましいわいつ！人が真剣に悩んで「振り返らない」って決めたのにあんたはあ！」

「それって無視するって事でしょ？なんで？どおしてそんな事するのぉ！？陰険な意地悪？そんな事するっていうなら私だって考えが

あるよお兄ちゃん!」

「それやつ!」

「な…なに?」

最後の部分で聞き捨てなら無い事を聞いて、竜は叫んだ。他人にイチイチ「お兄ちゃん」等言われたらたまったものではない。

「その「お兄ちゃん」ってのやめえ! あんたとは完全無比に他人やつ!」

「じゃ、これどうぞお。 はい」

「ん?」

千穂は背中に背負っていたアライグマの姿をしたリュックから、緑色の紙切れを一枚差し出してきた。それを受け取りながら訝つて見ると、紙には「住民票」と書いてあった。しかも、名前の所が「草原 千穂」となっていた。

「なんやこれ?偽造証?」

「ちやーんと都知事の印あるよお!」

昨日の日付で受理されているその紙を、破りたくなりながら千穂に返してかぶり振る。要するに書類上でも家族になっている

…「兄妹」に…。

「昨日今日ですぐ出来るんかいな…。全くゲームの世界やなこれ…」

見知らぬ美少女がイキナリ家に住む事になり、そのままその義兄妹と良い仲になったりするゲームを思い浮かべてしまう。…が、これは現実なのでそんな甘い事にはならないだろうと竜は思った。

千穂も同じ学校に通う事になったのだが、学年は一つ下の一年生。正直中学生かと思ったがどうやら童顔なだけのようだ。

「入学手続きに必要ななんだって。 お兄ちゃんも編入手続きしなきゃ、でそ？ 職員室いこ」

「……！？」

何気なしに校舎を指して、ポケットからその「編入手続き」を出してきた。

「な…なんでお前が持つとんねん？ 確か手提げに……あら？」

持っていたブルーの手提げ鞆には筆記用具だけ入っていた。教科書等は今日支給されるので、後は今日必要な書類だけが入っている。…ハズだったのだが…。

「にこにこにこお」

千穂が微笑んでいる。

その顔を見た瞬間、頭の中で一筋の光が駆け上がった気がした。どうやら竜は古い人間では無いようだ。

「私とて、ニユータ○プのハズだ！」

「は？」

「いや…抜き取りよったな!？」

聞き返す千穂を無視して拳を挙げて激昂すると、「きゃああ〜」
と言いながら千穂は逃げていく。

それを見ながら竜は嘆息してゆっくりと歩き出す。

まあ、どうでも良い。面倒臭い。

新しいスタートが、一人では無いという事だけで、心強いのだから…。

AM 8:25

私立新海南高等学校・職員室前中庭

- - -
- - -
- - -

きんこんかーんこんかーんきんかーんきんかーんきん

ドタッ

「ど…どうしたの？お兄ちゃん?？」

「い…いや、妙に外れたチャイムだなと…」

学校が変わればチャイムも変わるのだな。と思っではいたが、思いつきり吉〇風にコケてしまった。

「というか、予鈴ですかあ？ 早く職員室を見つけなくてはいいけません」

「お兄ちゃんがこつちだつて言うから来たのに、中庭じゃない！……つてさつきからなんでそんな喋り方なの？」

千穂が聞いてくるので、自身満々に答えてあげた。

「何を言っているんだい。立派な標準語じゃありませんか！」

「どちらかって言えば、怪しい訪問販売かチャー〇ー浜だよ……」

妙に言葉の語尾のアクセントが高いので気持ち悪い。竜もそれは気が付いていたのですぐに頷いた。

「まあ広い学校やからな……。ついでに見学したと思えばいいんや。ほら、そこやな」

中庭から校舎の窓の中に「職員室」と書かれたプレートを下げた部屋を見つけた。入り口を探そうと千穂が見渡しているのを尻目に……。

「あ！ お兄ちゃん！？」

窓を開けてそのまま中に飛び込んだ。幸い廊下には人は居なかった。

「こっちのが早いで？ はよ来いや」

「私スカートだよ！？ できないよ！」

そう言つて走つていくのを眺めながら自分だけ先に職員室のドアを叩いた。

「失礼します」

扉の「職員室に入る前はノックしましょう」という張り紙に基づき、ノックしてから中に入る。

中に入ると、すぐの席にプラツチックのプレートで「教頭」と書かれた物が置いてある。そこから前に並ぶ様に各教師の机があつた。流石に校舎が広いだけあつて、職員室も広かつた。

とりあえず竜は、すぐ近くに座っていた女の教師に話し掛けた。自分の担任を探すためだ。

「あの、すみません。お…俺、新田つていうセンスのとこ行きたいんやけど…」

「社会科の新田先生？ 新田先生なら…ほら、あそこにいらっしゃる眼鏡の先生がそうよ」

女教師は、すぐ斜め前を指して教えてくれる。

そこには、言われた通り眼鏡をかけたショートカットの地味な…さえない若い男が席に座っていた。女教師に指されて、ヘラヘラと愛想笑いをしている。

「ああ…。草原君だね？ 話は聞いているよ。私が新田^{ニッタ} 昇^{ノボル}だ。
しかし君もこんな中途半端な時期に編入とは大変だね」

「ええ。困ってますわ。何分右も左も分からん状態ですんでよろし
ゆう頼んます」

そう言って握手を求めようとしたが、新田はその手を気付かない
振りをして流してきた。

（なんや？ いけすかんセンセやな。握手も出来へんのかい）

「き…君は確か前の翔星学園^{ショウセイガクエン}をば…暴力事件で退学になったそうじ
やないか。こっちではそんな事は無いように頼むよ…」

なるほど。この先生は自分に怯えているようだ。どうやら見た目
通り臆病な性格らしい。

（あのハゲ校長チクリおったな…）

当たり前である。

「考えとくわ」

竜は無然と答えた。おかげで新田先生は弱った様に頭をポリポリ
と掻いている。

「ま…まいったなあ…。そ…それじゃ君の妹さんは一年からですよ
ね？」

急に言葉遣いが変わってしまふ。面白い先生だ。

「はい。一年の…A組と聞いているんですが…」

「おわっ！？ いつの間に居たんや？」

急に後ろから声がして驚いたが、いつの間にかそこに千穂が居た。

「今来たトコだよぉ〜ヒドイよお兄ちゃん！ 先に行くなんてえ！」

「ええと…職員室では静かに…」

新田先生がぼそぼそと聞こえるか聞こえないかぐらい小さい声で諫めて来る。

「ああ！ すいませんええと仁井田先生」

「いや…私は新田だよ…。ええと、草原千穂君だね？ 君は確か担任の先生はそちらの下々原^{シジハラ}美奈^{ミナ}先生だよ。物理を担当して下さいます」

千穂の担任は先ほどの女教師のようだ。ロングヘアーが似合う落ち着いた綺麗な先生だ。

「さて、そちらはお任せして…。草原君。教室へ行こうか」

「あつ？ ああ…。ほな、千穂ちゃ…千穂、またな！」

「うっん」

何故か咄嗟に呼び捨てにしまった。他の者に二人の関係を説

明するのが面倒だったからだ。千穂は呼び捨てにされて嬉しそ
うだが……。

AM 8:32

私立新海南高等学校・本館校舎三階廊下

- - -
- - -
- - -

少しうんざりした顔で歩く新田先生。その後ろでよそ見しながら
ダラダラと着いて行く竜。

あれから、三階へ上り、二年の教室へ向かう。

この学校は本館が4階建てで、4階が一年、三階が二年。二階が
三年と下がっていき、一階は職員室や、事務室がある。他の校舎に
は技術棟となっていて、機械室や実験室等の棟がある。

「しかし、気の弱いセンセやな……。あらあまだ結婚してないで。
よく学校一番の美人のセンセに片思いとか……。なんや変態趣味の
一つや二つ……。まさか！ 隠し撮りビデオとかが引き出しにい！？」

「そんな事はしていませんっ！ 失礼な」

「あ……」

いつの間にか立ち止まって、こちらを見据えている。どうやら思
慮を声に出してしまっていたらしい。

「ええと……それぐらいボキャブラリーあつた方が面白いかなあつ

と……」

「そんなボキャブラリー産業廃棄物並に使えません！ 調合したって賢者の灰にもなりやしない！」

怖い事を言う。最後の方は意味が分からなかった。

「はぁ……。君はいつもそうなのかい？」

心底深い溜め息をつく新田先生。

「え~~~~と……あつ！ここが俺のクラスやな！？ 2年C組
ほな、新田センセお先にどうぞ〜！」

「はぁ……………」

何か竜には、今の自分の一言でかなり勝手に「納得」された気がした。

AM 8:35

私立新海南高等学校・本館三階二年C組教室内

- - - - -
- - - - -
- - - - -

出席と取って。

「ええと、今日はこのクラスに新しい仲間を紹介します。皆さん仲

良くしてください」

新田のその言葉に生徒達は色めき立つ。

「センスー転校生ですか!？」

「変な時期に転校生だな？ 変な時期じゃない転校生ってのも知らないけど」

『カッコイイ（カワイイ）かな〜？』

「萌えか燃えかどっちだ!？」

「ちくしょーめえ〜 イベント発動〜〜!!」

「ほらほら。静かにしなさい。教室に入りづらくなるだろう？ こういうのは最初が肝心なんだよ？ ほら、皆がうるさいから入って来ないじゃないか〜 お〜い草原君〜 入りたまえ〜」

.....

「あれ？ どうしたのかな？」

教室の扉の前でまっっているハズの竜は中々出てこなかった。

「もう出てきていいんだよ〜？」

それを聞いてかどうか、教室の扉が勢い良くガラッ！と開いた。それと共に竜は妙に腰を低くして手をパチパチ叩きながら入ってきた。

「ども〜！ はいっ！ よろしくおねがいますね〜草原 竜っていいますわ〜。今日は学校へ来たんですけど学校って言えばアレですね、私としては制服を思い出しますねっ！ 世界は俺の物だ〜！

そりゃ征服やる！・・・はいはい。その人啞然としない。
.....なんて芸人ノリした関西人違うからよろしゅう」

『.....』

竜以外のその場に居た全員が何があつたのか解からずに、啞然と
している。

「おおー！関西弁じゃん！」

一人の男子生徒がそう叫んだ瞬間から、時間がまた動き出したよ
うに騒がしくなった。

「なんや。外したかと思つたわ...」

竜にしても第一印象は大事だと思つていたので、この台詞は前の
晩に考えていたのだ。少し緊張して中々入れなかったが、それも間
を取ったと考えれば成功だと納得した。

となりで小さな声で「そんなボキヤブラリーもいらないよ・・・」
と呟いている眼鏡が居るが知つた事では無い。

「この学校関西人以内から驚いたよ」

「アレ？確か先生に居ただろ？ほら、保科とか、矢尾とか...」

「でも、生徒には居なかったわよね？聞いた事無いじゃない」

という証言を元にこの学校には関西人は竜一人のようだ。

「俺、標準語嫌いなんやけどな...」

関西人は関東人とは性に合わない気がする。関西人に言わせれば、

関東人のアクセントが生意気に聞こえるし、関東人に言わせれば関西人の喋る方はキツそうなのだ。

竜の場合、母がこちらの人間なので慣れてはいるはずなのだが、生活はずっと関西だったので今一つ割り切れないでいる。

しかし、全く関西人が居ないなら居ないで、人間は環境に適応していくものだと感じた。嫌になってキレるぐらいでもなさそうだ。

AM 10:41

私立新海南高等学校・本館三階二年C組教室内

- - -
- - -
- - -

それから休み時間になって、雪崩れのように質問攻めが続くので初めは愛想笑いをしながらなんとか凌ぐが、時間が経つにつれて段々と疲れてきて鬱陶しくなってしまう。しかし、三時間目の休み時間には人がやっと少なくなった。

「ねえねえ、竜君。　ウチのクラブ入らない？」

それを見計らって小柄な女生徒が近づいて来た。

竜君！？馴れ馴れしいなあ。…………でもかわいい…やん。

クリクリとした目と、ショートカット…ちょっと外に跳ねている癖があるが、それもまた似合っていた。しかし、この感じにはちよっと記憶にある。どこかで感じたような…。

「あっ！」

何処かで見たような！？

「私、火鳥^{カトリ} 茜^{アカネ}って言うのお。よろしくね。そういえば竜君ってどっかで会わなかった？ 何か初対面って感じがしないんだよね？」

「お…俺もそんな気が…：…まてよ…公園…公園でだ！」

「えっ！？ 公園って守矢公園？…き…昨日？」

昨日、守矢公園で出てくる時に走りこんできた女の子に似ていた。というか…本人のようだ。

「ああ、アンタが泣きながら走りこんでいったのを覚えとるわ」

やはり、昨日の女の子のようだ。まさか、同じ学校の同じクラスとは思わなかった。

「うえええ…。恥かしいよお…」

「あんとき何かあったんか？」

流石に気になって聞いてみるが

「ええと、こんな所で再会したのは運命の出会いだね！ それで…」

全く聞いていない。というが無視された。

「それで、この出会いを記念して一緒にクラブやらない？」

あらかじめ用意していた台詞なのだろう。完全に棒読みだった。

「あのねあのねっ。それでねこの学校の…」

「ちょ…ちょっと待てや！ こっちの話を…」

「東に不思議な事があれば東に！ 西に怪事件があれば西に！我々は」

「じゃー…かましいっ！！」

「ひやあああっ！？」

新調してもらった教科書を丸めて思いっきり後頭部を叩いてやった。それでやっと止まったが、殴られた辺りをさすって「？」を浮かべているようだ。思いつきりトランス状態だったようである。

「まあまあ落ち着いて話しようや。なんや？ クラブの勧誘かいな？ まあ部員勧誘ってのは大事やと思うけど、人の気持ちも考えてもらわんと…。なあ火鳥さん」

「う…ん」

やっと話の主導権を握り、余裕を持って話し出せた。神妙に話を聞いてくれるようで悪い人では無いようだ。

「…うん。ごめん…。迷惑だったよね…。強引過ぎたよ」

「そ…そやな。まあお互いの事もあんま知らんし、もうちょっと仲良ようなつてからまた頼むで」

それを聞くと茜は下を向いてサラサラのショートカットの下に暗い表情を覗かせてしまった。流石にそこまで落ち込まれるとは思っていなかったのだから「ぎよっ」として慰めの言葉を掛けようとするが、人間焦ってしまうと上手く右脳が働かない。

しかし、そう考えていると、今まで聞こえていなかった辺りのヒソヒソ話が妙に聞こえやすくなっているのに気付いた。というか、聞こえる程声が大きくなっていただけだが。

「ほら、また火鳥の奴クラブ勧誘してるわよお。ほんとと迷惑なのよね！あの娘」

「一年の時も田代君入っちゃったもんねえ。図々しくて」
「ウチも部員少ないのにな…」

のんびりした女と、内気そうな女と、キツイ女の三人。の内声がデカイのは最初のキツイ女だけだったが、何故か三人とも良く声が通ってきた。

ええ様に思われてへんねんなあ。この娘…。

そう思うと可哀想になってきた。一度でも知り合った人間をけなされるのは気分が良い事ではないし、本音を言えばこんな可愛い娘が回りから虐げられるのを見るのは嫌だ。

もっと極端に言えば顔が気に入ったし、お前等は圏外！

…ぶつちやけた話、なりふり構わない言動で一言言つとすれば「黙れブス」だ。

まあ、そんな事はいいいとして…。

茜の方を見ると、どうやら彼女のも聞こえたらしく、顔が青ざめている。それを見ていると、目線が茜と交わり、茜は表情を明るくして言ってきた。

「…あつ！ゴメンねえ。それじゃね」

そのまま、力無く肩を落として席に戻ろうとするから、余計に同情してしまって次の瞬間、竜は引き止めていた。

「まった！」

「え？」

「クラブってどないして入るんや？」

「えっ……」

茜は一瞬分らない顔をしたが、すぐに手を合わせて歓声を上げる。

「えっ？ええっ！？　いいの？」

気の良さそうに笑いながら……反面、苦笑しながら竜はその笑顔を見返してあげた。

「ああっ。どうせ家帰ってもヒマやからな」

「うわゝありがとう ウチ部員少なくて困ってたんだあ」

凄く嬉しそうにはしゃぎ回る茜。それを見ているところでちまで嬉しくなって、いらぬ事まで言ってしまう竜。

「それで？ どんなクラブなんや？」

「あれ？ 言ってなかったっけ？ ……良く入る気になったね？」

「うっ…」

こう返ってくるのは目に見えているのに…。流石に同情と下心で入ろうとしたとは言えず、フォローを入れようとするがますますドツボにはまる。

「それは、アレや！ 学校のパンフレット見たんや！」

「……でも。私まだクラブの名前言ってなかったよね？ ……あれ？ 言っただけ？？ あれえゝ？」

竜の苦し紛れの言い訳は、ほぼこの一言でかき消されてしまった。

「まっ…せっかく入ってくれるんだから別にいいわ。それで、ウチって副部长いないのね。竜君よろしく」

「はあ？ 聞いてへんで!？」

「当たり前だよ。今言っただもん。ホントは部長と私合わせて4

人居るんだけど、皆違う役に就いてるんだあ。副って名前だけだからいいよね？　　というか決まりで決まったあ！　それじゃね〜」

「あ！　おいっ！？」

　　またも強引に話を進められて、勝手に戻っていった。竜の呼び止める声は完全に無視された形である。

「忙しいやつचना…」

きーんこーん…

　　竜の呟きと同時に例の気の抜けたチャイムが鳴る。この音と共に忙しい日々の幕開けのような気がしてならない竜であった。

P M 0 : 0 6

私立新海南高等学校・本館三階二年C組教室内

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

「午前の授業も終わり、お昼の時間。　草原　竜のような生徒の場合、学校に来る理由の一つがこれの為だと言える…」

「勝手に決めんなや！　……ていうかいきなり出て来て何やねんなた！」

　　チャイムが鳴ってから数分後、竜が伸びをしながらアクビをしていると、急に横から声と共に小柄な学ラン姿の怪しい者が立っ

た。

その者は言われてフフツと不敵に笑い、そのまま親指で自分を指して名乗り出した。

「誰だ！　と言われれば答えるしかあらんかな…。　我はこの学び舎の支配者……その名もラインハルト！」

「なにい！？　って！　ライン…ってどう見ても日本人やろあんた…」

竜の冷静な声は聞こえてないのか、ラインハルトと名乗った者は台詞は喋るのに熱を上げている。

「転校生というのは貴様かあ！　この学園は我が支配の内に成り立っている！　貴様の……あいたあっ！」

ラインハルトは後ろから現れた茜に殴られていた。

「なにやってんのよ！　ちくちゃん！　またそんな格好してえ！　転校生いじめちゃ駄目でしょ！？　まったく」

「うう…。茜え良い拳持つてるわ。危うく三途の川見る所よ。心なしか真っ赤に燃えてない？　でもねえ。最近ネタ無くってさあ。」「転校生初バトル！おまえは炎の○校生か！？」的なノリで良い記事になると思っただのよお」

「今時そんな三面記事いらないよ…」

ラインハルトは急に女言葉に変わると茜と気軽に話している。竜

は気になって辺りを見渡してみるが、それをポカーンと見つめながら佇んでいるのは自分だけのようだ。皆慣れている様に、特に気にした様子は無い。数人「ほら、ただだぜ」と面白そうに言っているだけである。

「なんやねんアンタ…」

良く見ると確かに女のように、学生服が微かに膨らんでいる場所を眺めて最後に改めて顔を見る。何処にでもあるような顔だが、元気な笑顔と意思の強そうな眉が印象的なショートポニーの女性だった。ちなみに天辺に触覚のような毛が一本伸びている。目は擬態ではないだろうが、電波を受信したり出来るかもしれない。まあ電波だ。

「私はらいんは…」

「もうええて…」

またも偽名を名乗ろうとする彼女を寸秒で止めると、横の茜に視線を転じた。茜は呆れた顔をしながらラインハルト君を睨んでいる。

「この迷惑暴走娘は、保科^{ホシナ} 千奈^{チナ}ってこの学校の新聞部の部長さんよ」

「あいさ〜！ よそしゅ〜たのんます〜てへへ」

紹介されて少し恥かしそうに関西弁で話す保科千奈さん。

「ん？アンタ関西人かいな？」

妙に熟達した関西弁に竜は訝った。微妙なアクセントがしっかりと発音されていて、変に懐かしさを感じるくらいだ。

「この学校には関西人おらへんゆうてなかったか？」

その言葉に保科はキラリと瞳を輝かせて雄弁に語り出した。

「ウチのおとうはん、関西人やね。ヒラカタって所が実家や。だから昔からよう聞いとったし、よう実家帰ったから嫌でも覚える。ああそうそう。ウチの学校におかあはんがおるんよ」

保科は腰に手を当ててフフンと鼻を鳴らした。

「さて 無難な所で、趣味とか自己紹介してもらえるかなあ？ 転校初日で学校一有名な生徒にしてあげるわよ」

保科は何処から取り出したのかボイスレコーダーを取り出して、ずいっとにじり寄って来た。

「なんでや！ いちいちそんな事せんでも普通に暮らしとるだけであえやろ！」

鼻先に当たるマイクを押し返しながら、竜は叫んだが、保科は怯む様子は無い。長年の取材で強引さと忍耐力には自信がありそうだった。

「まあまあ。アナタが裸電球舐めまわしたり、緑色の妖精が見えるとかそんな変態でも驚いたりしないからさ。根掘り葉掘りずずいとお願ひお願い」

「あ…あほかっ！そんな例あげるアンタのが変態やる！？」

「ああゝひどいんだあ！ 女の子にそんな事いうなんてえゝ」

「さっき思いつきり男装しとったやんけっ！宝塚かアンタ！！」

「竜君ゝ。ちゝちゃんの質問は答えた方が楽だよ？ じゃなきゃ家まで着いて来ちゃうよ？」

茜から恐ろしい助言が聞こえた。自分より確実にこの新聞部とは付き合いが長そうな者の助言なので素直に聞いた方がよさそうだ。

「そうそう。名前からお願いね。撮ってるからゝ。恋人とか居る？ スポーツは何が好き？」

「俺は草原 竜。16歳。恋人はおらん。スポーツはやってへんけど身体は昔から鍛えとるな」

「ふむふむ。草原 竜君16歳現在恋人募集中、女性に襲い掛かる体力は並では無い…」と

「またんかいつ！？」

「何よ？」

「何よ？ とか聞くか！？ 誰が襲い掛かるねん！」

「ああ、比喻よ。襲い掛かるキケンがあるとは誰も言ってないでしょ？ ええと…次は…」

「勘弁してえや……」

その後次々と質問をされて、その度ツツコミを入れ続けたので、竜はこの休み時間には全く休めなかった。どうも茜といい、この保科といい人の話をちゃんと聞かないヤツラばかりのような気がして、竜の関東人の印象マイナス¹。

P
M
3
:
1
5

私立新海南高等学校・本館三階二年C組教室内

[illegible]

「ほうつかつご〜」

元氣良く跳ねて、竜の前まで来た茜は目の前で踊っている。竜の精神ポイントが下がった気がしてしまう。 どうでもいいが声がピクンク色だ。

「元気やなあ茜ちゃん……」

今日一日で質問責めばかりだったので、精神的に参ってしまった。いる竜は、放課後だというのにまだ机から離れられないでいた。

「竜くん歳寄りだよ。ほらほら、楽しい楽しいクラブ活動にいざ行かんイスカシタル」

「遠すぎるやろそれ…」

「そうそう。せめてガンダーラにしときましようよアカネ」

「それでも国外やろ…っておわっ！？またアンタかい！」

とても自然に話しに加わってきたツインテール元氣娘保科が、カバンとボイスレコーダー片手に机に座っていた。今度はちゃんとセーラー姿であつたので改めて女性だと感じれる。

「神出鬼没が新聞部員の鉄則よ。追いかける側が足取り見破られるのは愚の骨頂だもの」

「さ…さよか」

全てを信じるわけではないが、人間離れた隠密行動が本当なら「支配者」という言葉もあながち嘘だと言いがたいかもしれない。この新聞部に逆らえる人間は校内には居なさそうだ。

「それでちゅちゃん何しに来たの？ 質問とかってお昼に一通り済んだんでしょ？」

「いやーだあ アカネと私の仲じゃないの」

「どついう事??」

「幼稚園から始まって小中高と同じ学校で家も近所の幼馴染にしては、まだまだ保科千奈という私を知らないようね」

「…高校の願書出す時に脅迫まがい志望校聞きだした癖に…」

仲が良さそうだと思ったなら幼馴染だったようだ。そして、昔から強引な娘だったようだというデータを竜は頭のメモリーに記録させる。保科千奈、危険度Aに認定。

「要するに…」

スツと机から飛び降りて、右手を開いてこちらに掲げてくる。動作がイチイチ演技臭いのだが、彼女の場合それが普通なのだろう。

「久し振りにフシケンにお邪魔しようと思ったのよ。ほらほら、海洞先輩にも会いたいし…なんたって」

「同じ穴のムジナだから…でしょ？」

「ムジナってタヌキ？」

良く分からないが、フシケンという所に行くようだ。

「フシケンって何なん？」

「ん？ ええと論より証拠…」GO…！」

「よっしゃーデッパツーやでクサちゃんー」

「誰がクサちゃんやねんっ!？」

そう言つと少女二人に手を引かれて、竜はクラブの部室が集まっている文化煉がある校舎へと向かう。教室がある校舎と、クラブの部室や実習室等がある校舎が別にあつて、中庭を挟んである。その

途中で食堂と駐輪場、駐車場が広く場所を取っている。

連絡通路を歩く竜達の横に、野球ウェアに身を包んだ一団が号令と共に通り過ぎる。遠くでは吹奏楽のルパン3世のテーマが流れている。とてものかな放課後の空気と春の気配にいつの間にか気分は良くなっていた。

草原 竜の章 第4話 倶楽部

PM3:25

私立新海南高等学校・文化煉1階

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

「着いたよ」

火鳥茜を先頭にどうやら「クラブ室」に到着したようだ。その扉の前に張り紙で「不思議研究倶楽部」と書かれていた。

「ふしぎけんきゅう?」

「そそ」

茜は簡単に答えて扉をゆっくり開けて中へ入っていった。

「ぶちよゝいる?」

「ども」

「はあゝいカイドーせんぱあい」

中に入るとすぐに背の低い丸テーブルがあった。そこに

「やあ、火鳥君。それに保科君も。…おや？ 最後の君は侵入部員かい？ それとも新入部員かい？」

「はっ？」

とてもものんびりした感じの長身の男が座っていた。座っているの
で分かりにくいが座高は高いのでそうだろう。意味不明な事を言っ
た彼は手元にメモ帳を一枚取り出して「新入」と「侵入」という文
字を書いて竜に見せてきた。

「あ…ああ。成り行きで来てんだけど…よろしゅう。えっとアンタが
部長さんなんか？」

「失礼。自己紹介が遅れたね。僕は海洞^{カイドウ} 風末^{フミ}3年B組だ。このフ
シケンの部長と生徒会会計補佐もしているので宜しく」

「フミちゃんやな。俺は草原 竜。2年C組。今日転校してきたば
っかりやから色々よろしゅ」

「後、下の名前は嫌いだから呼ばないで欲しいのだが、いいかな？」

「？なんでや？可愛い名前やんか？」

「りゅ…竜くん…あの…」

茜が遠慮がちに竜の袖を引っ張ってくる。その視線で「やめたほ
うがいいよ」と語っている。海洞は右手をテーブルの下に降ろした
が、その腕が震えているのが見えた。

「ん…。いや堪忍してや。悪戯に気分悪くさせるつもりは無いんや」

「ほう。物分りと頭の回転が速いのだね。君は」

一瞬前まで険しい顔だった海洞はまた表情を柔らかくさせて、下げていた右手からコトンとテーブルに何かを置いた。

「ナイフ？」

刃渡り15Cm、肉厚5Cm程の小振りなナイフがテーブルに置かれて場が一瞬緊張する。

「危ないよ部長……」

「大丈夫ですよ。頸動脈を切るつもりだっただけですから」

「ホンマ危ないな！？アンタ！」

表情を変えずに恐ろしい事を言う不思議研究倶楽部部長は、ナイフを制服を開いて内ポケットに締まった。後で聞いたがこれは攻撃用というよりは暴行を受けた時の防御：護身用らしい。

「何にしる。ようこそ。草原 竜君。先程の話では転校初日という事だから我が部の事を簡単に説明させて貰おうか」

「あ、ああ。よろしゅう頼むで」

「まず…、名前から分かる様に不思議な事を研究する部だ。不思議な事というのは超常現象や、難事件、日頃から真実の分からなかった古典的な謎何かを好きに調べて公表しようという部活だ」

「だから私達新聞部と連携しているのよ」

と、保科も続ける。

「はあ。難事件とか古典的な謎って言うのは何となく分からんでも無いですけど…。超常現象なんてしよっちゅうあるもんでもあらへんでしょ？そんなんでやる事あるんですか？」

一応上級生という事で今更敬語（？）を使う事を思い出した。

超常現象というのは霊等も含まれるのだろうが、常識で考えればそんな物は存在しない。

それを聞いて茜が「あのね」と微笑みながら肩を叩いてくる。

「私あるよ」1・2回

「さ…さよか。そうやんなあ」一生に1回あるか無いかで、しかもそれは疲れてて幻を見たとか
そういうのやし…」

高速道路等で見る幽霊等も疲れ目から見えてしまうと何かの本で
読んだ事を思い出して、竜はそう口にしたのだが…。

「一生？ううん。一ヶ月に1・2回だよ？」

「はあっ！？」

単純に計算して一年に12回、人生80年として最低960回そんな事がある事になる。

「特にこの前の廊下に走る血だらけの女の人にはビックリしたよ」

「火鳥君それはもう解決済みだよ」

「えっ？」

「その真相は、化学実験をしていた女生徒が水素を爆発させてしま
って痛みで疾走していたという事らしい」

「あやゝ危ないねえ」

「危ないねえゝって単なる事故やん！？ 超常現象違うし」

「逆にそういう真相が全く分からないような事件は超常現象と呼べ
るんだよ。何も靈魂を信じているわけじゃない。一度会ってみたい
がね」

悪ぶる様子も無く笑って語る部長を睨みつけて叫ぶと、冷静に返
答が帰ってくる。

「ええゝ？部長それは違いますよ！幽霊は存在しているんですよ。
今ここにもそこにもあそこにも！エロイムエッサイムエロイムエッ
サイム我は求め訴えたりゝって」

謎の呪文を唱えながら火鳥は熱弁を始めた。彼女はとうやら超常
現象信者のようだ。

「良く疲れからや、変な薬で幻覚が見えたとか、地盤が傾いていて
家具が勝手に動いたとかしょうもない理由でお茶を濁してしまいま

すけど、本当に霊が動かしていないと証明出来ないんですよ？ 世界各国に残るそういう伝記はどういう事ですか？ ヴラドと呼ばれた吸血鬼や、中国のキョンシー、日本には妖怪がとて多く跋扈しているでしょう？ 少し昔でも人面犬なんてのも噂になりましたよね？ それらがただの見間違いにしては目撃情報や文献が多すぎると思いませんか？」

「私としてはアカネの言う事に賛成します。私自身物を書く人間なので分かりますが、無駄な事を書物に残す労力をする必要性からして、霊魂の存在は完全に否定して良いとは思えません」

女性二人はそう熱く語るのだが、この部長は眉一つ動かさずに静かに笑って耳の少し上に手を当てて。

「逆に言えば、必要だから書物に残したんだよ。例えば、某国の宇宙人目撃証言の話等は政府の情報操作だとも聞きくし。吸血鬼は「早まった埋葬」をしてしまった死者が墓を抜け出して血を吸いにやってくるというのが始まりだけど、これは「早まった埋葬」への罪悪感から来ていると考えられないかい？ しかもこの時の怯えた村人達 聖職者、医師、法律家は武器を携えて吸血鬼と思われる墓を暴き、その死体の心臓に杭を打ち込んだり、斧で頭を胴体から刎ねる。これが当時の仕来りとして残っているらしいと本で読んだ事がある。それにこの「早まった埋葬」には恐ろしい事に近代までごくありふれた現象だったと言うんだからね。1980年の初め、パリで駐車場を作るために一八世紀の墓を掘り起こしたところ、墓の3つに1つが「生者」が棺桶から脱出しようと苦闘した跡が残っていたらしい」

「うわっ……」

「本当の話ですか？」

「もちろんだよ。日本でも似たような話があるけど、それは置いて…。後、吸血鬼についてはオカルト作家のデニス・ホイートレー氏がこんな説を言っているよ。いいかい？ 浮浪者は気象条件が厳しい折りには、墓の中に居場所を求めた」

「わざわざ墓を掘り起こしたんですかあ？」

「たぶんね。ええと、それで…」

海洞は思い出す為に頭の横を抑えながら続けた。癖らしい。

「多くの吸血鬼伝説はここに出所が求められる。痩せさらばえた酷い身なりのこの連中を見て、村人達は怯え、これこそ吸血鬼に違い無い…と早合点した。って言っている。後、何も迷信深い農民達だけが吸血鬼の存在を唱えたわけじゃないよ。人体にはまだまだ現代医学では解明されない事が一杯あるからね。身体の中に聖傷があったりとか、治癒の効力がある香ばしい油が抽出されたりとか、腐敗が早まるような形で埋葬した死体が全く腐敗しなかったりとかね。その「腐敗しない死体」が吸血鬼に間違えられたというわけさ」

「はあ。吸血鬼よりゾンビみたいやけど…博識やな。流石部長してるだけあるわ」

素直に感心して竜は賛美を贈るが、部長はそれを遮って人差し指を横に振った。

「そんな事より、私が言いたいのとは間違えた知識を持つとそんな間違っって殺された人達が浮かばれないと言う事ですよ」

「その発言は幽霊を肯定してません？」

部長が語るのを神妙に聞いていた茜はその言葉を聞いた瞬間、鬼の首を取ったように微笑んだ。

しかし、亀の甲より年の甲というか、部長は振っていた指を火鳥に向けて。

「さっき言ったけど日本にも似たような話があると言っただろう？
そういう信心は無意識に我々にも植え付けられているという事を示したのだよ。火鳥君は鬼ごっこを遊んだ事があるだろう？」

「え？…ええ、もちろん…それが」

何か？と聞き返す前に部長が話し出す。

「あれも鬼と呼ばれた人達の悲惨な事を示しているんだよ。詳しくは自分で調べてみると良い。最近ではミステリー小説で詳しく書かれている物もあるから火鳥君にも簡単に調べられるよ」

「はあ…い…。部長負けず嫌いで困りますけど一応見ときますね」

と皮肉を交えて答える茜。

「…で、結局何すんねん？」

いきなり吸血鬼の事等を詳しく語られても、部活動の趣旨を分か
りかねてしまう。竜には急に座談会を始めた不思議研究倶楽部部員
達を交互に見てそれを伝える。

「実践で示したのだよ？　こういう不思議な事を討論したり、公表する為に記事を書いたり、記事にする為に色々調べたりするのが主な仕事かな。まあ、深く考えずにお茶でも飲んでまったりと語るという事だけでも構わないよ」

そう言うのと部長は立ち上がり、部屋の奥にある冷蔵庫から缶にはいった緑茶を4つ持って戻ってくる。良く見ると、冷蔵庫の他にもテレビやビデオやMDコンポ、扇風機に温風機、電子レンジに炊飯ジャーや食器、本棚にはオカルトの怪しい参考文献だけでなく漫画や写真集もある。今座っている丸テーブルも冬場はコタツになるそうだ。大体広さ7・8畳の部屋なのでそれだけの物があると少し狭く感じてしまう。

「住み込めそうやな…」

部長に渡されたお茶の缶のプルタブを開けて、一口飲んでから竜は溜め息混じりに呟いた。それを聞いて部長が恐ろしい事を言う。

「泊り込みで調べ物をする事もあるからには最低限の物を置いてあるんだよ」

「泊り込みまでするんかい…」

「面白いでしょう？　私も正直最初はアホっぽいかと思ったんだけど、こうやって内面を知ると結構本格的なのが分かったのよ。それに頻繁に活動してくれるからウチの記事には困らないってワケ

」

保科が来ている理由を簡単に答えると、まるでビールでも飲む様

に手に持ったお茶の缶をぐいっと一気に空けた。

「要するにオカルト研究会かいな。それでも月に1・2回の頻度で起こる事件つても常識や無いな」

「この辺りがパワースポットになっていて霊とかが集まるんだよ。そういうのを見て「裸電球舐めまわし」なんて事する困った人も出来ちゃうわけ」

「もちろんよ。さっきのお昼の質問も、私がお変なんじゃなくて周りがお変な人が多いからそれも常識となってるからよ。流石に地元じゃない人は普通みたいで安心したわ」

恐ろしい事を言う女性二人。

「な…なんやねんそれ…」

「補足して置けば、そんな「変態」の目撃件数は決して多い事はないのだが…。彼女達は運命的に遭遇率が高いようだね」

「そうですね。僕が調べた内では先月は5件。今月はまだ0件ですから少ないと思いますよ」

何処か少年の様な高い声で喋る声が後ろの扉からしたので振り返ると、背の低い眼鏡の少年が立っていた。

「お、小山君おはよう」

「おはよう御座います部長。それに火鳥さん。保科さんいらっしやい。…最後は…誰ですか？」

小山と呼ばれた少年は一通り挨拶しながら部長の後ろに回って正座した。

「？なんでそないなトコに座つとんねん？顔見えへんで？」

「え…いや…えつと、う」

部長の後ろで喋っているのまるで、部長が喋っているように見えてしまつて可笑しい。後ろの小山を庇うように部長は苦笑しながら。

「彼は人見知りが激しくてね。今日の所は勘弁してやってほしい。じきに慣れるだろうからね」

「まあ、よろしゅう少年」

1歳違いだが竜は見た目で「少年」と呼ぶ事に決めた。

「あ…はい。宜しく願ひします」

ボソボソと恥かしそうに答える少年は、そう言つと部長の後ろから顔を出してくれた。

「まあ、これで顔見せ終わつたんやな。確か部員は4人ゆうてたやろ？初心者やから分らん事ばかりやと思うけど堪忍したってな

」

「ちよつとまつたあああああつー！！」

「!？」

竜が言い終わるかどうかで狭い部屋に雷鳴のような声が響き渡った。同時に入り口のドアがガン!と乱暴に開かれる。

「俺を忘れてもらっちゃあこまるぜ！」

そう言いながら親指で自分を指して、大声で名乗る男子生徒が一人立っていた。

「なんやねんコイツ……」

見た印象は中肉中背の普通の男だが、鋭い目をキラリと光らせた鷹のような印象を受けた。学ランのボタンは全部外されており、中には「ガンホ！」と筆文字で大きく書かれたＴシャツ一枚。元気一杯である。

「誰ですか？」

それを見て小山少年はまた部長の後に隠れてしまふ。それを見て元気な男はへっ!と笑う。

「誰でしたっけね？」

部長が笑いながら言っている。顔見知りのようだから知っているのだろうか？

「誰だったかしらねえ」

保科も部長に倣って笑っている。二人を睨みながら拳をワナワナ

と震えさせている元氣男。

「だれ？」

茜は…天然であるようだ。しかし

「あ…茜ちゃんまで…」

そこでダメージを受けて崩れ落ちる暴発男。

「なんや？誰も知らんのかい。部長、侵入部員みたいやで？」

笑いながら竜が言うと、先行自爆男は一気に復活して竜に歩み寄ると、その胸倉を掴んで

「なんだオマエは！ 氣に入らねえなっ！」

イキナリ殴りかかろうとしてきた。

「ちょっと田代君。乱暴は」

男は田代というらしい。それを横に聞きながら竜は目で彼の拳だけを見ていた。

「おらうっ！」

気合一発。田代の拳は竜の頬を思いつきり

「おそっ」

ゴオンッ！

殴るつもりだった様だが寸での所でかわした。田代にとって必殺の一撃だったのだろう。その攻撃の反動でそのままテーブルに突っ込んでしまった。

「きゃあ！」

火鳥の悲鳴。派手は音はテーブルにぶつかった音。木製のテーブルが割れそうな勢いで、そのまま倒れてしまつて置いてあつたお茶の缶が2つ転がった。そのまま田代はのびてしまった。

「なんや。自爆しよつたで？おもしろいな田代ちゃん　不良なんコイツ？」

こういう事に昔から慣れ親しんでいた　主に母親の絶対的な力等で　竜にとって、田代の攻撃は赤子同然だった。それを面白い玩具を見つけたかの如く眺めて部長に向き直る。

「あ、ああ。素行不良で良く問題を起こしている生徒だが…。草原君大丈夫かい？」

テーブルを戻して、田代を脇に退けながら部長は雑巾を探していた。聞かれて座りなおした。

「ああ。大丈夫ですわ。カスリもせーへん」

「しっかし惜しいなあ。図らずも『転校生！初バトル！オマエは炎の転○生か！？必殺技は国電パ○チ？』が実現したのに…。一発KOじゃ面白くもなんと無いわ」

田代を解放もせずに、保科は薄情な事をサラッと謎の言葉を言うのける。横で火鳥は田代に雑巾で頭を冷やしてあげているのに。勿論、こぼれたお茶を拭いた雑巾のようだ。

「つめたっ！」

それで目を覚ました田代は火鳥と目があって表情を歪ませたと思うと、その手を掴んだ。

「え？なあに？」

「茜ちゃん！やっぱり君は優しい良い娘だなあ。介抱してくれたんだね」

お茶の染みた雑巾とは知らず感動した声で田代はそういうと、竜を睨んで吠えた。

「てめえ…よくもやってくれたな！」

「…なんもとらへんやないか……自爆やる？」

呆れた声で返したが、それに余計に激昂してしまつたらしく、茜を押しつけて竜に対峙してきた。

「う…うるさい！ 手加減して外してやったが今度は容赦しねえ！勝負だ！」

熱い男である。

「なんやねんな〜メンドクサイなあ。大体部外者やる？はよ散れや」

「誰が部外者だ！部外者はオマエと保科だ！オレの聖域荒らすんじゃない」

「あーケースケひどーい」

「はいはい。田代君そこまで」

またも掴みかかろうとした田代の手を部長が止めた。

「ふざけてしまってますいません。草原君。彼はウチの部員の一人ですよ」

「は？」

言われて竜は田代を上から下までもう一度確認した。外見は学生服なので竜達のそれと変わらないが、着崩していて廊下で教師に会えば注意されそうな感じである。体つきも部長や小山のような文科系のようでは無く、しっかりとした…いや、少しがっしりしている。気づかなかったが顔は結構格好良い方かもしれない。ただ

「性格悪いな」

「つんだと！？」

不良元氣少年。そんな一言ですませれてしまいそうだった。

「ホンマにコイツが部員？ 役立つんかいな？ 空手部とかやったらええけど、どーみても文化の薰りせーへんでコレから」

「人の事「コレ」扱いするなこらあ！」

「ええ、残念ながら」

「残念つてブチヨーっ!？」

とりあえず打てば響く 用法違うが ような性格で退屈はしない
かもしれない。

「とりあえず。これで全員揃ったようだね。彼は田代タシロ 蛍助ケイスケ君だ。
主に力仕事をしてもらっているが、列記とした部員の一人だよ」

「あ。ああ、田代蛍助16歳二年C組だ」

部長は爽やかな笑顔で田代を見ただけなのだが、それだけで一瞬
で彼は静かになった。竜の知らない主従関係が出来上がっているよ
うだ。

「てゆうーか同じクラスやん!？」

「うんうん。私と竜君と一緒にだよ。あれ?そーいえば今日見てなか
ったね。けいすけ今日どうしたの?」

「え、ええっ!えとちよ…ちよっとお腹の調子が悪かったので今来
た所なんです茜ちゃん!」

顔を赤くしてとても怪しい言い訳をしているが、竜も関西の学校
の時はあまり優等生では無かったので分かるが、ただ寝てたとか遊
んでいただけだろうと確信した。ただ、この田代の態度も何故かす

ぐに理由が分かった。いや、誰でも分かる。

「ええー大丈夫なのけいすけえ？」

ここに一人分かって無い人間が居るが。

「あ…ああ、全然大丈夫！ほらこの通り！」

と両手をブンブンと振り回したものだからその腕が竜の胸に当たってしまった。

「いったあ！なにすんねん！」

実際は少しも痛くなかったが、狭い部屋で暴れている彼に苛立っていたのでつい語気が強くなってしまった。

「お？お悪い。オレ手長いから」

「あーなるほど。さつきそのながああい手が当たらんかったんや。運良かったんやなあ。よかったよかった」

「あん！？もっぺんいつてみる！」

「なんぼでも言つたるわ。このヘタレ」

「へ…へたれ？！ 貴様あ許さん！」

「ちょ…またですか貴方達…」

そんなこんなでこの部には馬鹿が一匹居るようで、これからの学園生活に不安が混じってしまったわけだ。

それから彼等の事や部の事や、保科の新聞部の詳しい活動についての説明等がされた。

そうしている内に日は落ちて、小山少年が買ってきたジュースにアルコール入りが混じっていたりしたりして何故か宴会のようになってしまった。

草原 竜の章 第5話 放課後

PM7:25

神葉町内

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

「いや、茜ちゃんが家の近くやったんやね。夜道一人ちゃうから寂しいわ」

「うん、私もおっげぶ…」

「あら。大丈夫かいな？ 飲みすぎやで茜ちゃん」

「だってえ。じゅーすだと思ってたんだもん…ふらふらするよお」

「あ、大丈夫ちゃうな。ほら、掴まりい」

「あうあう竜君やさしいねえ…ぽよぽよ」

などと言いながら一緒に帰るといふより護送しているような感じであるが、竜としては嫌な気分では無い。

「ちよおつとまったあああううあ……げほっ！」

コレが居なければ。

「何で着いてくんねん。お前家逆ちゃうんかい」

グロッキー寸前の田代はフラフラしながら竜達の後を着いてきていた。

「お…オレも茜ちゃんを送るって言って…んだ……よお！げええ…」
倒れこみリバース。

「うわぁ…蛍助きつたなあいゝさいてー」

「がーん」

蛍助最低

蛍助最低

蛍助最低

蛍助最低…

蛍助心のエコー。

「きつたね…。それに、そないな足取りでどないせーちゅうんねん…。茜ちゃんもこんな状態やし…。あ…」

竜は足を止めた。「此処」で足を止めたのは二度目である。竜の前には『守矢公園』と書かれた公園がある。

「…？ どうしたの竜君？」

「……」

「…ん？なんだ？ 立ったまま寝たか？」

竜は倒れていた者へ掛け寄り、抱き起こそうとした。しかし、その瞬間その者は目の前から消えてしまった。

「え…」

「おい！ どうした…んだよ！」

茜を背負いながら田代が追いついてきた。中々体力があるようだ。

「今人居てん…」

「は？ 何言つてんだ？」

「今此処に人が倒れてたんや！ お前見てないんかい！」

「はあ？ 酔っ払って何訳分からない事言つてんだ…。うぷう…走ったら気分が…」

「酔ってへん！ あれぐらいで酔うかいな！」

「うづう…叫ばないでよお竜君…。何い？ なにがあつたの？」

「ああ、茜ちゃん堪忍。いや、此処に人が倒れとつたんやけど…目の前で消えたんや」

「えっ！？」

それを聞いて茜は田代の背中から飛び降りた。目をキラキラさせて竜に詰め寄る。

「うつそお！ それは大事件！不思議事件だよお！ もー酔いなん
て一発覚めっ！ でで、顔とか見たの？」

少し足取りが危ないが、氣力が勝っているのか茜は嬉々としてス
カートのポケットから手帳を取り出した。

「顔？……」

「あれえ顔見てない？ 近くまで来たんでしょ？」

「いや…一瞬の事で…。いやまてよ…」

確かに一瞬だったが顔を見たような気がしていた。しかも、どう
も一度見た事があるような感じまでしている。

「なんだよ…わけわかんね…ん？」

「何か見た事あるような気がしてるんやけど…」

「うんうん！ それで？」

それ以上は思い出せそうに無かった。大体こんな非常識な知り合
いは居ない。だとすると

「あ、もしかして今朝の」

「え？ 何か思い出した？」

「あ、いや。夢の話なんやけど。その夢に出てきたヤツに似った
ような…」

「夢？ … あっ！もしかしてそれって予知夢とか！？」

「うんにゃ。今まで似たような夢見たんやけど一度もそういう場面に合った事は」

そうして彼女に竜の夢の話を説明した。今朝の夢は少し刺激が強い内容なので、他に見た男女（？）の会話の夢などを話してやると茜はますます目を輝かせた。

「すごいよ！ 竜君ってサイコメトラーなんだね！」

「な！？ なんでそないなんねん！」

「だって自分が体験してない事ばかり夢に見るって事は何かの記憶を読み取ってるんだよきつと！」

「はあ？読み取るゆーても普通にベットに寝とるだけやで？何かの写真を枕元に置いてたわけやないし…」

「言っただでしょ？この町全体がパワースポットになってるって」

「へ？冗談ぢやうかつたんかい？」

「だから、竜君の潜在能力が増幅したのかもしれないよ？ この町全体の記憶。そしてこの公園の記憶を読み取ったのかも…。あ、そうすると竜君が見たのは…この公園で死んだ人？」

「分からへん…」

頭には残っているような感覚があるのだが、本当に出て来なかった。茜の言う事が正しければ今朝夢に見た少女なのかもしれないが、それとは違うという気がしていた。

「うーん。そうだ蛍助どう思う？　ってあれ？　蛍助は？」

「ん？」

茜と話し込んでいて田代を見ていなかったのも、竜には分からなかったが、見渡してみると、すぐ近くの茂みを覗き込んでいる蛍助の背中が見えた。

「おーい何やっとなねん」

「うわあ！？　ビックリさせるなよ！」

身体をビクツと震えさせて、振り返った彼は少し顔が青ざめていた。

「今そこに人が座ってたんだ」

「えっ！」

それを聞いて、茜も駆け寄っていき、茂みを覗き込む。

「ほえ？　誰も居ないよ？」

暗くて良く見えないが、人影はそこにはなかった。

「ああ、だから過去形なんだ。「座っていた」って言っただろ？　そ

「こに変な髪型の女の子が隠れてた」

「変な髪形あ？」

「んで、どないしたんや？」

一瞬「変な髪形」という言葉に千穂を思ったが、流石にもう家に帰っているだろう。

「ああ、消えた」

「消えたあ？蛍助酔ってたんじゃないの？」

「それは無い！さっき吐いてスッキリしたし」

胸を張って言う台詞では無い。

「うわっ最低」

「蛍助きつたなあい」

「で、ででも！ちゃんと拭いたぞ！？」

「制服でえ？うわあ寄らないでえ」

「変態」

「変態言つな！」

竜に向かって激昂する。

「変態」

「ムキー！！」

猿だ。

「っていうか、変な髪形ってまさか三つ編みが混ざった感じの髪型とかちゃうやんな？」

一応可能性を潰しておこう。そう思って軽く蛍助に聞いた。

「お？お前も見たのか？」

可能性復活。

「こらあああ！ 千穂ちゃん何しとんねん！」

まだ近くに隠れているのだろう千穂を炙り出す。急に叫んだ竜を見て二人は驚いたが、呼ばれて茂みからガサゴソと現れた少女を見て余計に驚いた。

「ひい！出たあ！」「きゃー！！！！」という歓声を聞きながら、「変な髪形の少女」千穂が現れた。

「あれえ？何で分かったの？お兄ちゃん？」

「変な髪形やしな」

苦笑しながらその三つ編み部分を見つめる。

「なんでソレそんな少しだけ三つ編みやねん？」

「あ？知り合いか？」

「チホ？？おにいちゃん？？」

二人には初対面の「妹」なので、竜は軽く説明しなくてはならなかった。ただし、此処での出会い等は省略して養子で、血は繋がってない兄妹という事だけ説明した。

「ほあゝ。お前の妹にしては可愛いとは思ってたぞ」

「わあ。田代さんありがとー」

嬉しそうに跳ねる妹。血は繋がってないが、一応身内になってしまったので、子供っぽい仕草をされるとこちらが恥かしくなってしまう。

「ねえ。千穂さん。貴女名字は何ていうの？」

何か茜が、先程より元気が無いように見える。神妙な顔で千穂に質問した。

「え？草原だよ？ お兄ちゃんと一緒だよ。当たり前だけど」

「違うの。ええと…」

茜は何かを考え込んだように眉間にシワを寄せて、思いついたように再度質問した。

「ただいまあ」

「あら、お帰りなさい。遅かったのね？」

家に帰るとエプロン姿の母が出迎えてくれた。玄関に靴があるので父も、もう帰っているようだ。

「ああ、なんやイキナリ部活誘われてん。そのまま侵入部員歓迎会ばい事になって遅くなりましたわ」

「部活？アンタ前は万年帰宅部だったのに珍しいわね？」

「前は前や。新しい環境には巻かれるもんやで？」

「えっらそうに。それで千穂も？」

「うっん。私はお兄ちゃん待ってたんだよ」

「そうやったんか？」

「そうだよ。それなのにお兄ちゃん全然姿見せないから公園で待つてたんだよ？ひどいよ」

「そうやったんか。寒いのに堪忍」

「何？一人でこんな遅くまで公園に居たの千穂？貴女、女の子なんだから危ないわよ気をつけないと」

「うん。今度から気をつけるよ」

今まで子供は竜だけだったので、母の千穂の可愛がりようは竜には異様に感じた。その視線を鋭く感じたのか母はこちらを睨んでくる。

「まったく。アンタが遅いから千穂を危険にさらしたんだからね？
今日は晩御飯のオカズ1個マイナスよ」

「はぁ！？そんな殺生なぁ〜」

「ちなみに今日はエビフライよ」

「おかんーーーーー殿中ですよ〜〜〜」

「…お兄ちゃんそれ用法違う…」

そんなこんなで竜の学園生活1日目は終了した。

女も目が覚めたようだ。

「はふ……おにいちゃんおはよー ふえ？」

一応千穂は服を着ていた。有り得ないが間違いが無かった事が分かって竜は安堵したが、それでもこの状況はよろしくない。お約束のように竜の手が彼女の胸を鷲掴みにしていたのだが、一瞬で手を引いて誤魔化した。

「お……おい。何でそこ寝とんねん！」

本当は大声で叫びたかったが、この場に声を聞きつけて、母が来た場合を考えて最小限の声で激昂した。

「あはは。暖かったねえ」

「そんな事聞いてへん！ 節度無いんか！？」

「ううん。だってお兄ちゃん襲うような人じゃないのは分かったから。別に兄妹だし寝ても問題無いよ？」

「血い繋がってへんし、元々他人や！」

「ええゝ。大丈夫だよ。こういうのは意識のもんだ……。問題あるみたいだね……」

「おお？ そうやそうや。問題ある。よーわかったやんか……って何処見てゆーて……あ……」

千穂の視線は竜のズボンの方向に向いていた。

――

「はよーもーにん」

「おはようございまーす」

「おはよう竜、千穂」

居間へ行くと母が朝食を用意していた。食卓には大根の味噌汁とチーズ餃子が並べられている。

「チーズ餃子？」

「そんな名前じゃないわよ」

形状はそんな所だが、たしかに中華では無い。母の得意料理の一つで名前は知らないが、結構美味しい。メリケン粉の皮に溶いた卵と小麦粉をかぶしてそのまま焼くんだそうだ。

「朝から高カロリーやなコレ」

「チーズは身体に良いんだからいいのよ」

フロアリングの居間のテーブルを母と、千穂と、竜の3人で囲む。父はまだ寝ているようだ。

「おとん今日休みなん？」

「今日は昼から少し顔出すだけらしいわ。良い身分よね移動してきたばかりなのに」

味噌汁を一口飲んでから食べ始めた母に、欠伸混じりにそう聞くと母は顔をしかめながら言った。

「お父さんは何の仕事してるの？」

昨日、父とは夕飯で少し顔を合わせただけの千穂は、お茶と一杯飲み切ってから御飯に箸をつけていた。竜はまず米である。こうして見ると癖というのは違うものだと思った。

父は出版社に務めているのだが、竜も詳しくは知らなかった。答えに困って母を見ると既におかずの大半を平らげていた。いや、いくらなんでも早い。

「ごちそうさま」

そう早口で言い終わるとそそくさと、母は洗い物を始めた。分かりすぎるが逃がっている。

「？」

「千穂。早く食べて着替えてしまいなさい。貴女まだパジャマですよ」

「はい」

言われた通り千穂はピンクの半纏を羽織っていた。その下は黒猫のプリントがしてあるこれも地がピンクのパジャマだった。勿論これは千穂の持ち物で無くて母の物なので少しサイズが大きい。

腕が出ない袖をパタパタ振りながら2階にある自室へ向かう千穂。

2階は竜と千穂、母と父の寝室に書斎がある。

竜も食べ終わり、着替えようと部屋に戻りがてらに母を捕まえた。

「なあ、おかん？なんでおとんの仕事の事黙ってたんや？」

「は？何の事？」

「は？やないて。別に裏家業やあれへんねんから黙っとつたら余計怪しいで？」

いくら何でもあの場で、母の態度に気付かなかった事は無いので、その辺は省略して竜は問い掛けたのだが母はそれも無視して洗濯物を干しに行こうとした。

「ちょ…ちよつと…」

その後を追おうとした竜に気を止めずに、母は行ってしまった。流石に強引に止めようとも思わなかったので竜は仕方無く支度に取り掛かった。

AM 8:15

新海南高等学校・2年C組

- - - - -

竜の家から学校まで徒歩で20分程で着くので、気になる程では無いが、着いた早々に机に突っ伏している竜を見つけて茜が挨拶しながら顔を覗き込んできた。

「おはようゝ竜君。どうしたの？体調悪そうだね？」

その声に反応して顔を起こすと昨晚の真剣な顔は無く、いつもの明るい顔があった。

「ああ、茜ちゃん。はよーにん」

「何語？」

「あ、いや…」

寝惚けていつも家でするような挨拶をしまつて竜は舌打ちした。これは竜のオリジナルの挨拶で「グットモーニング」と「おはよう」を足した言葉だ。幼少の頃から気に入って親しい者にはこれを使うのだが、何か説明が恥かしくて、こちらではこの挨拶は封印していたのだが。

昨日1日である程度打ち解けてしまったのだろうか？

そんな事を自問していると、茜は「？」を浮かべながら自分の席
竜の斜め後 に戻っていった。

それに入れ替わる様に今度は保科が現れる。

この「現れる」という表現は彼女には適切であった。一体何時の間に近づいたか分からないからだ。その時も、竜が茜が戻るのを確認して後を向いている間に既に、目の前に居た。

「おっはよお」 転校生君。今朝の記事が出来たわよ!」

こちらが驚いているのに構わず保科が持っていた紙の束を開いてみせる。

そこには

『転校生初バトル! お前はリアルバウトの回し者か? 必殺技は0.5秒の神速避け!』

…等と書かれていた。

「まてや~~~~~!」

「あん お気に召してくれたのね!」

「なんでやねん! 思いつき事実捏造すんなや! コレもしかして昨日の田代とのヤツやる!?」

その記事の端に「フシケン」の部室が写っていた。そしてそこには部長のコメントまでもあり、最後には「勝者インタビューは後号!」と書いてあったりする。

「いや」。あれから部の皆に話してみたら「それでいきましょう!」

つてなっちゃって あ、教師方面にはこちらから話してあるから問題にはならないわよ」

楽しそうに語る保科を見て、呆れながら記事を読み返した。

なるほど。退屈な日常には刺激的で面白そうな事件ではあるが、その当事者としては迷惑である。名前が売れる。とか、そういう問題では無く、人権無視も甚だしい。それにこんな記事を読めば

「こおらあー！ほしなあ！」

「あつれえ？けーすけえゝおはよゝ」

「おつはよーじゃねえっ！なんだこの記事はあ！」

もう一人の当事者「田代 蛭助」にはたまったものではない。

「ごめんね？あまりに一瞬で負けたっていうのが意外だったしゝ。それにしても今日は早いよね？」

「ああ、今日は妹に…。って！そんな事よりその「負けた」ってのが納得いかねえんだ！オレがいつ負けた！」

「激昂はごもつともゝ。でも経過と結果どっちから見ても「負けた」で構わないって言うのよゝ」

「誰が！？」

「クサハラ君がゝきやつ」

そう言つてチラリとこちらを見てくる保科。それを聞いて田代が鬼の形相で向かつてくる。

「な…そんなん何時言つてん!？」

当たり前だが抗議すると、保科はサラッと一言。

「昨日の部室で午後3時50分」…なんもしとらへんやないか…自爆やる?」という発言を元に考察しました。てへ」

それによつて田代を軽視したという判断らしい。時間等が一瞬で返つて来たのは何かで測つていたのだろう。

なにしろ、田代がこちらの胸倉を掴むまでの時間に短く言い終えると、彼女は早々にその場を少し離れて非難している。

「てめえ! 昨日は大人しくしてたが、もう許さねえ!」

「お…落ち着けや! 今日そんな気分ちゃうなんて!」

今日では無くても、基本的に暴力沙汰だけは避けたかった。転校2日目からまた転校したくは無い。前の学校でも暴力事件を起こしたのだが、それも彼には非が無い事件だったのだが、結果的に彼が全てを請け負う形になったただだ。

友達がイジメられていたのを助けたのだが、その事が担任に知れ、「お前は最低の人間や」と言われた事に嫌気がさしてついでに教師も殴つただけだ。自分に非は無い。

そんな事を思い出していると、右頬に強い衝撃を受けて倒れる。

殴られたようだ。

「いった！なにさらすねん！」

殴られた右頬をさすりながら起き上がると、今度は顔面を狙った拳が見えた。

「おらあ！」

物思いに耽っていた先程とは違い、今度は難なくそれを避ける。竜は手早く立ち上がると、田代の鳩尾を狙い、鋭い蹴りを放つ。ヤクザキックというヤツである。

「ぐはっ！」

急所に綺麗に入って倒れこむ田代を見ながら、冷やかな視線を避難している保科に向けた。

「お前ええかげんにせえよ？」

「え？私？」

保科は投げかけられた言葉の覇気に怯んで冷汗を流しながら答えた。

「お前や！面白い記事かなんか知らへんけど、アンタが焚き付けたバカが怪我して、責任取れんのかい！」

「ええと…そんな事言われても、これは娯楽の一環で…」

少し涙目になっている保科を見て可哀相にも思えたが、自業自得である。こういう事ははつきりとケジメを付けないと気がすまない
ので、竜は呼吸を整えて告げる。

「うるさいわ！ アンタ…田代もよう聞いとけ！ 俺は、俺に危害
加えてくるヤツは容赦せえへん。言つとくけど手加減でけへんから
な？ 命までは取らへんけど、格闘術はほぼ素人やから保証せえへ
ん」

「……」

竜が言い終わると、教室内は静寂に包まれた。言われて田代は震
えながら立ち上がっている。保科は放心したようにこちらを見してい
る。他の者は…、事情を知らないまでも、重苦しい雰囲気を目を逸
らしているが。

「分かったんか。保科、蛭助」

「お…」

保科が下を向きながら近づいて来た。

「お？なんや？」

「面白い！」

そう言つて顔を上げた保科の目はキラキラと輝いていた。

「はあ！？」

「いい！ 断然良い！ これこそ漢字の漢と書いてオトコだね！ 心意気やヨシ！」

「な… なやんねんそれ！ お前俺の言うた事聞いてへんかったんかい！」

「よく聞いたわよ うゝん私惚れそうよ」

保科は楽しげにそんな事を言ってくる。

「クサハラあ！」

そこに田代が拳を震わせて復活していた。

「カツコイ事言いやがって！ 格闘術は素人？ へっ！ 知るかそんなもん！ 誰が自分の身が可愛くて殴るんだよ！」

こちらにも馬鹿がいる。

「蛭助！？ お前も何言うてんねん！ こんな茶番つまらんやろ！？」

「つまるつまらにじゃねえよ！ これはオレのプライドをかけた戦いだ！」

熱い。

「こらあゝ。ちゅちゃん！ けーすけ！ 何してるのよ！」

そこにやつと茜が割り込んできた。今まで傍観していたようだが、

流石に收拾がつかなくなっているので出てきたといったところか。

「ちゅちゃん！ 昨日転校生に迷惑かけちゃ駄目って言ってたでしよ忘れたの？ それに蛍助！ 昨日から竜君にちょっかいかけてるけど何か恨みでもあるの！？」

「あ、そろそろHRだわゝ戻らないとゝ」

そう言っ保科はそそくさと自分の教室に戻っていく。

「う…茜ちゃん。これは…」

「言い訳無用！ ちゃんと竜君に謝りなさい！」

田代が言い終わる前に茜は激しく田代を叱責する。元々、田代は茜に弱いが、ここまで真剣に言われると素直に「迷惑かけたな」と頭を垂れてきた。

「あ…ああ、分かればええねん…」

そんな田代と竜を身がならウンウンと頷く茜。

この学校で一番難敵かと思った保科より強い彼女は、実質上学園最強のようだ。普段の可愛い印象も、こんな折には逞しく見える。

昨日の人懐っこい彼女。

部活での元気一杯の時の彼女。

昨日の公園での彼女。

そして今の彼女。

竜の知らない彼女がまだ色々ありそうで見ていて飽きない。彼女と同じ部活になったのは正解かもしれない。最低でも退屈はしない。

「覚えとけよ」

そんな事を言いながら田代は自分の席　竜の真後ろ　に戻っていった。それに茜が「こらー」と言っているのを横目で見ながら担任が来るのをまた机に突っ伏して待った。

早く静かになっしてほしい。

そう強く願いながら。

草原 竜の章 第7話 日常(2)

P M O : 1 5

新海南高等学校・2年C組

お昼になって、竜は手提鞆から弁当箱を取り出した。もちろん母が作ってくれた物で、今日のおかずはウィンナーと卵焼き、カボチャの煮付けにミックスベジタブルの炒め物だった。ちゃんとお新香も入っている。御飯はおかずと別にもう一箱あり、そちらには肉そばろが敷き詰められていた。

言うまでも無いが、早弁はしていないので満載である。

それと水筒にコーヒーを入れてきたので暖かいままで飲める。御飯にコーヒーというのは人に気持ち悪られるが、竜にとってコーヒーは水のような物なので、あまり気にした事がなかった。

「りゅくくん」

まだクラスメイトと親しくないの一人で食べていると、茜がやってきた。手には可愛いサーモンピンクの包みに入った小さな弁当箱を持っている。

「一緒に食べようよ。竜君」

そう言いながら、前の席の机を勝手に動かしてこちらに向けてくる。その机の主は、食堂に行っているのか不在だった。

「あ…まあええよ」

女子生徒と一緒に食べるのに恥かしさを覚えながらも、そう答える竜に、茜は笑顔で頷いて包みを開いた。楕円の弁当箱にはおかず半分、御飯半分。竜の4分の1の大きさの箱に収まったそれを見ながら「それで足りるん？」と聞くと茜は笑いながら「いつも残しちゃうんだあ」と答えた。

「あー！」

そんな声が突然響いた。見るとそこには手に菓子パンと牛乳を抱えて教室に戻ってきた田代が、こちらを指差して叫んでいた。

「てつめえ！　なんて事してやがる！？」

意味が分からなかった。「食事している」と答えればいいのだろうか？

「どうしたの？　蛍助？」

茜にも分からないようで、疑問符を2つ頭の上に装備しながら田代に聞くと、その反応に衝撃を受けて彼は頭を抱えながらヨロリと後退した。

「あ…あかねちゃん…。オレが誘っても一緒に食べてくれなかったじゃないかあ…」

なるほど。嫉妬しているらしい。

「え？　そんな事あったっけ？　けーすけいつも昼頃になったら席

で食べずにいる事あるけど…。もしかしてソレ？」

「…ええと…」

あからさまにうるたえている。どうやら肯定のようだ。

だが、それだと、どう考えても「誘って」いない。かなりの奥手らしい。

「なんだろ。口で言ってくれたらいつでも一緒したのに」。だめだよ？ちゃんと口で言わないと」

「ま…マジっすかぁ!？」

茜の言葉に田代は急いで椅子を持って来て、竜の机の横につける。そのまま機嫌に菓子パンの袋を開けて、食べ始めようとしたが、その前にこちらに顔を近づかせて来た。

「おい。今日はお前のおかげだ。海より深く感謝する」

と、良く分からない礼を言ってくる。そうして笑顔のまま食べ始めた。

「なんや、お前調子ええなあ。今朝の事忘れたんかい…」

呆れて言うこちらの声も聞こえていないのか、彼の笑顔は崩れなかった。

「蛭助も悪い子じゃないんだよ？ 今朝はきつと気が立ってたんだよ。ほら、全部ちゅちゃんが悪いんだよウンウン」

「そうそう。あのバカがあんな事書かなきゃ殴ってねえよ」

と、茜の言葉に続いて調子の良い事を言っている。

「簡単にキレルんは悪うないんか？」

卵焼きをかじりながら顔をしかめてそう言つと

「まあ、元々気に入らなかつたが」

田代はやはり笑顔でそんな事を言つた。

「なんやねんソレ！」

「うるせえな最初はお前が…」

そこで区切つて田代は小さな声で耳打ちしてくる。

「茜ちゃんにちょっかい掛けてるかと思つたからな」

「はあ？」

そして離れて笑いながら

「まあ、普通みたいで安心したぞ」

等と言つて牛乳パックの中身を一気に干した。

「？」

それを見て茜は、当たり前だが分からないといった顔をしている。

「あほか…。思い込みの激しいやつだな…」

「あはは。けーすけは昔からそうだよな」

「おう！　オレは昔から一途だぞ！」

「誰に？」

茜は首を傾げる。物凄い鈍感というか能天気な女の子だ。

「そ…それは…」

流石に聞き返されると思わなかったのか、田代は視線を泳がせている。

「うー…。あ、あれ保科じゃねえ？」

「ん？」

彼の言葉に教室の入り口を見ると、姿勢を低くして入ってくる保科が見えた。

「あれ？　ちゅちゃん？　おい」

保科を見つけて田代への質問はどうでも良いのか、そちらに意識をむけたようだ。

そうされて、安堵と不満に思ったのか近づいてくる保科を睨む田代。

「はい　ラインハルトこと保科千奈ただいま参上！　えへへ茜」

上目遣いに茜を見て、手に紙袋を抱えていたのを茜に差し出す。

「うん？　何これ？　…わあ　文保堂のワッフルじゃないきや」

目をキラキラさせて、紙袋の中からワッフルをひとつ取り出して口に入れる。

「ぶんぽう？」

「うんうん。ベルギーワッフルに続いてこの近辺では有名なワッフルのお店なんだよ　おいしい…って食べてよかったのかな？」

「口に入れてから聞くとは相変らずね…。えっと、今朝のお詫び。ちよっとやりすぎだったかなあって思ったから走って買ってきたのよ」

「わ　そんなのいいのに　ち　ちゃん大好き」

「ふ　ん。保科って意外に良い奴やねんな」

今朝はそのまま逃げた形になったが、こうやって詫びに来るのは中々出来る事では無い。いくら自分に非があっても、中々謝ったり出来ず、そのままの者が、ほとんどのハズである。

もし、自分が同じ立場ならそのまま逃げていたかもしれない。

そう思うと、この保科という女に好感が持てた。

「これ、俺も食べてええんか？」

美味そうにほうばる茜を見て、竜も涎を垂らして見てしまった。
元々甘党で、これは秘密だが、たまにお菓子も作ったりするのである。出来たてのようで、湯気を立てているワッフルを前に黙ってられない。

「ええ。いいわよ。ダーリンもごめんね？」

「ええてええて、気にしてへんから…。おっ美味そうやなコレ。俺はチョコワッフルかハニーワッフルか悩む所やけど…ここはプレーンでええか」

そうやって三人が嬉々として昼飯後のお茶会をしていると、田代が少しつまらなそうに見ていた。

「なんや？お前食べへんの？」

紙袋の中にはまだ6つ以上残っていたので、たぶん彼の分もあるようだ、彼は手をつけなかった。

「俺、甘いのだメなんだよ」

「さ…さよか…もったいないなあ」

流石に甘党じゃないとこの砂糖タップリのワッフルは辛いかもしれない。歯が痛くなりそうな程甘い。チョコワッフルはそれほども無かったが、プレーンは常識より1・5倍程砂糖加減が増しているようだ。

「うつふふ」 新聞部の情報網を舐めて貰っちゃ困るわよ？ けーすけ。アンタにはコレよ」

「お？ ……おおっ！ それはっ！」

何処から出したのか、保科は今度は何かの缶と、ポリエスチレンの袋を取り出した。

一つは緑茶の缶と、もう一つは煎餅だった。

「お煎餅好きだって聞いたから雷門近くのお店の草加煎餅！ 特派員にお願いして買ってもらってきたのよ。それに甘いのが苦手って言っても洋菓子がでしょ？ 和菓子はいける口だって聞いたわよ？」

「まあ、最中とか小豆だったらな。くうくそれにしても、お茶は仕方無いが、これは泣かせるじゃねえか」

田代のお茶菓子も揃って、改めてお茶会が始まった。

「…しかし、アンタ今どっから出したんや…」

「女の子は隠す場所が一杯なのよダーリン」

訳が分からない事を言っている。しかし

「そのダーリンってなんやねん！ さっきから」

聞き捨てならない言葉を聞いて今度こそ咎めると、保科の様子が一変して艶っぽい感じに上目遣いをしてくる。

「あゝん 今朝ので惚れちゃったって言ったでしょ？ 有言実行の女よ私は。 じゃ」

「なんやて！？」

「おお！ 草原、良かったな！」

「ええゝ！ ちゅちゃん本気い？」

それぞれに驚き 一人は喜んでいるが の声をあげるが、保科は横から腕を絡めてきた。

「もちろんよゝ。私の身体にビビッって来たっていうか、もう運命って感じ？」

「ななな…なんでやねん！」

保科は自分の胸を押し付けるように密着してくるので、恥かしさで動揺して声が震えてしまった。しかし、流石に振りほどくのも気が引けるので、睨みつけるが、保科は逆にその視線が違う意図を示したと思ったのか目を閉じてきた。

「ほんとのお詫びは…わ・た・し」

「……」

口を尖らせてこちらに迫る保科を、無言でそのショートポニーを掴んで止める。

「きゃあ！　いったあい！」

「迫んな！　ちょっと見直したらコレかい！」

「ええ〜！　ダーリン私の事嫌い？」

「そ…それ以前にアンタとは昨日会ったばかりやろ！？　そのダーリン言うのもヤメえ！」

保科も強引な性格で、変な所はあるが、別に可愛く無いわけでは無い。そのショートポニーも少し子供っぽいが、似合っているし、意思の強そうな眉と悪戯っぽく輝く瞳も悪くは無い。だが、イキナリこんな事されても困る。据膳喰わずはなんとやらと言うが、そこまで鬼畜では無い。

「じゃあ、せめて「竜」って呼び捨てていい？　いいよね？　茜も名前で呼んでるんだから」

「ちょまで…まあアンタ言うても分からんみたいやし、呼び名ぐらいいえよ。ただ、それぐらいで

「惚れたはれた」言うてたら世話ないで？　もうちょいお互いに知らないあかんやろ？」

それを聞くと保科は大きく首を振ってショートポニーを揺らせた。意識して見ると、可愛い物だ。

「はあ。でもちゅちゃんってそういう方面は全く興味無いと思ってたよ。素直に驚きだね」

茜はワッフルを一通り征服して一心地着いたように溜め息混じりに言ってきた。

「そう？　今まで部活一筋だったけど、彼ってカッコイイでしょ？　乙女としては当然の反応よ。そうだ。茜はどうなのよ？」

「ええ！？　私？」

「そうよ。人の事より我が身を心配しなさい。アナタだって部活一筋じゃないの」

保科に言われて「あはは」と苦笑いを浮かべる茜。それに静かに田代は聞き耳を立てていたが。

「考えた事も無かったよ。私なんてちゅちゃんより全然可愛く無いし」

「そんな事」

「そんな事ない！　茜ちゃんはビーナスだ！　太陽だ！　絶対神だ！」

保科を押しつけ田代が鼻息荒く激しく異議を唱えた。彼にしてみれば「惚れた鼻屑目」があるだろうが、竜の目から見ても、茜は希に見る美少女だった。性格は保科より強引さが無いが、少し難がある。しかし、見た目と雰囲気だけを見ると可愛い。ショートカットで少しボーイッシュな印象を受けるが、大きな瞳と、そのあどけ

ない笑顔で確かに、田代の言う「ビーナス」と言えなくも無い。ただし、少し幼いビーナスだが。

「あ、ありがとけーすけ」

と少し顔を紅潮させる感じもGOOD。

「何にせよ、好きな人出来たら我が新聞部恋愛コラム部に連絡してね。待ってるわよ」

それを聞いて竜は先程の記事の端に「恋愛コラム・恋愛相談も請け負っています。お気楽に参加よろしく」と書いてあるのを発見した。その下に「今月のカップル」という所に「藤田啓太&芳川愛子」と描かれた所に二人のコメントが書かれている。「私達とっても幸せです!」と顔写真付きである。しかし、流石に此処に列記されるのは遠慮したい。

「じゃ、竜。此処に私達の事書いておくから後でコメント頂戴ね」

保科、言ってる側からこれである。

「こらぁー！ー！おのれは勝手な事ばかりかすんなぁ!」

そんなワッフルのような甘い時間(?)を過ごした今日の昼。

とても平和だった。

そして、時間は放課後。
茜の時間になった。

草原 竜の章 第8話 非日常の始まり

P M 3 : 2 1

新海南高等学校・文化煉1階不思議研究部室

「あはは。草原君も災難だったね」

部長はお昼の話を聞いて、のん気に笑ってお茶を啜っていた。

「ぶちよあゝ。笑い事やないですよ。人の身いにもなったって下さい」

「もてるって事は良い事だよ？それに彼女はこの学園のトップクラスの権力も持っている。学園生活が充実するだろう」

「好きでも無いのに構われたら良い迷惑ですわ」

「あれ？ 竜君ってちゅちゃん好きじゃなかったの？ じゃあ悪かったね。止めなくて」

天然娘はやっぱり分かっていなかった。

「ま…まあ、人間的には好きな感じがしたんやけど、あの強引さがあれへんかったらなあ」

「それを言うのは酷だね。彼女に強引さが無くなったら何が残るのか」

部長こそ「それを言うのは酷」である。

「そこまで言いますかぶちよ」

「あの〜」

そう朗らかに三人で話していると、今日は普通に顔を出している小山少年が割り込んできた。

「そんな事より、僕は昨晚の竜先輩の事件が気になっているのですけど」

何処から情報が漏れたのか、小山少年はそんな事を言ってきた。

「な…なんで少年が知つとるねん？」

当然と言えば当然の疑問に、小山少年はニヒルに笑ってこう答えた。

「そりゃあ、後を着けてましたから」

「はあ!？」

「小山君。一步間違えれば犯罪だよ？」

「情報集めは僕の専売特許ですから」

流石の部長も顔をしかめて彼を嗜めようとしたが、彼はハンディタイプのビデオカメラを片手にして得意げに言う。

「いいか少年。そういうのはストーカーって言っんや」

「女性のいやらしい画像が欲しいわけじゃありませんから問題ありませんよ？」

「列記とした人権無視や！」

「だって、昨日竜先輩とは殆ど喋ってないじゃないですか。だから交流を深める為に情報が無ければ不安になってしまいますよ。あ、それと昨日もう一人居た「田代」って方も僕は知りませんでしたから調べさせて頂きました」

「ん？ そうなん？」

「言っても無駄のようなので、とりあえず盗撮の件は置いて、少年が田代と認識が無いというのに疑問を感じた。一応部員であるのに。」

「けーすけあんまり此处に来ないから」

と茜が言つと

「そうだね。彼は週に一回ぐらい来ているが、部室を覗いてはすぐ帰ってしまうからね。特に火鳥君が居ない時は」

と部長が続ける。田代は茜目当てで部に来ているようだ。

「それで、丁度今まで会わなかったんか。へえー。」

「そんな事よりも！ 昨日の話を。僕は昨日遠くからしか見ていなかったなので良く分からないんですよ」

「ふむ。興味あるな。竜君お願い出来るかな？」

中々こういう事になると人間が変わるようで、小山少年は鼻息が荒かった。見た目は少女のようなのに、それだけみるとただの変態に見える。いや、この部室に居る者全員がそうなのかもしれない。自分を除いて。

「詳しい事は俺にも分かってへんけど、昨晚守矢公園で人が消えたんや」

「人が？ 神隠しか何かかい？」

流石にこういう部の部長である。こんな話を聞いても全く動揺が無い。それだけでは無く、キチンとメモの用意まで始めた。

「いや、神隠しかどうかも分からへん。ただ、その顔に見覚えがあったんです。ただし、夢の中で見た顔ですけど」

「ふむ…サイコメトリーか」

「あつ部長！ やっぱりそう思います？」

部長の言葉に茜が嬉しそうにした。

「サイコメトリーって何でしたっけ？」

小山少年はそう言って、部室の本棚を眺めながら言う。

「ESP能力。要するに俗に言う超能力だね。起源は忘れたが、サイパワーを持って物品等の記憶を読み取るような能力だね」

「ふむふむ」

小山少年は本を探すのを諦めたのか部長の話を聞いている。その本棚には色々な本があり、そこから一つの事を探すのには苦勞しそうな程の蔵書があったので、知ってる人に聞くという彼の判断は正しいかも知れない。

「ESP 超感的知覚 は「靈媒性トランス」、「自動運動」、「瞑想」、「夢」などにもなつて、時折発生する。1902年のマイヤーズの記録から1962年のL・E・ラインの記録等がある。その後の、1960年代の行動主義心理学全盛の背景を考えれば、初期のカード当てテスト・パラダイムの提唱者達が、健康状態や、異常刺激の効果、未知の観察者達の影響等の比較的総合性を持った行動主義的尺度に目を向けて、概ね、被験者達の心の内的状態を氣にとめなかったのも無理は無いよね」

「意味分らないよお」

茜が非難の声をあげている。果たして、小山少年は分かっているのか「ふんふん」とそれを聞いていた。

「まあ、夢を媒体としたESPの報告は多数あるという事だよ。とある調査では全体の65%を占めていたらしいよ」

頭に手を当てて話す部長。

「でも、公園と俺の家から10分ぐらい歩くで？ そんな遠くの事の記憶読み取るいうんですか？」

「いいかい？このサイコメトリーの凄い所は、横は45マイル、上には60フィートの事まで読み取ったという記録もあるんだよ。遠く離れた町からでも受信する事が出来るんだよ」

そして「ESP/超心理学の実験と研究」という本を手渡してきた。読めというのだろうか？

「それにしても、部長って信じてないって言ってる割にそんな事を鵜呑みにするんですね？」

「ある」と仮定しての話だよ火鳥君

「うゝ素直じゃない」

茜の呟きを無視して、小山少年は話を進めた。

「で、草原先輩の事はそのサイコメトリーだと？」

「私は、そう思っかな。ただ、何故火鳥君がそう思ったのかが気になるね」

「え？ だって夢の中で」

「夢の中で見たという事」サイコメトラーという発想が出てくる理由がありそうな気がしたんだけどね。思い違いなら失礼」

「もちろん。こういう環境に居ればすぐに思いつきますよお」

そう言っ て部室全体を包むように両腕を広げてみせる茜。そうして
みても、彼女の両手では全体を包むのは無理だが、そうされて竜
にはこの部室全体が紫色の空気に包まれてるような気がしてならな
かった。怪しい。

「そうかい？ 私はてっきりあの公園であつたあの事件の」

「部長！」

「ん？」

「その先は言わないで下さい。はい。部長の仰る通りです。確かに
「その事」があつたからすぐに思いつきました」

その時の顔は昨晚の彼女の顔だつた。彼女の顔を見て、短く嘆息
して部長は話をするのを辞めた。

「火鳥君。許してくれ。これはただの好奇心の発言だ。話を戻そ
う。 草原君、その顔は少女じゃなかったか？」

「え！？ ええ、そう言われてみればそんな気がしますわ。後、夢の
話ですけど若い男も居ましてん」

「男？」

「顔は見てへん…というか良く分からへんかつたんですけど、暴力
しとりましたわ。その少女に」

それを聞いて部長と茜が表情を険しくする。小山少年は特に変わ

らずメモを取っているが、この二人の変わり様はハッキリと分かった。

「いやに鮮明だね。草原君もしかして…だが、君は「最後まで見ていた」のか？」

「？」

疑問符を浮かべると、部長は咳払いをして言い直した。

「失礼。その少女がどうなったか知っているんだね？」

最後…。夢の中で少女は、若い男に何度も殴打されて殺された。とても気味が悪い夢だったが、部長の今の言葉で鮮明に思い出し、しまい吐き気がしてきた。

「火鳥君…。これはちょっと事件だ」

部長は竜の反応を見て肯定と取ったようだ。

「……」

茜は部長の言葉にただ頷くと、こちらを見据えている。その顔には何かの「意思」が込められているようで力強かった。

「火鳥君…。君が良ければ彼に話したいのだが…いいかな？」

「部長！？」

「彼はここまで知ったのだ。全て知る権利があるだろう？」

「そ…そうですね…。夢の話ですよ？」

「君がその能力を信じたからこそ言ったんだろ？ サイコメトラ
ーと」

「あの…何の話しとるんですか？」

二人は何かを知っているようで、秘密なやり取りをしているので、
たまらず竜は問いただした。

「ちょっと待ってくれるか？ 今火鳥君の了承を」

部長が説明するのを茜が止める。

「いいです。部長」

「ん？ 火鳥君？」

「私が話します。その方が正確ですから」

「…他人の私がしゃしゃり出てはいけなないか。火鳥君に任せるとし
よう」

「ありがとうございます。部長」

「？」

全く分からないが、茜が話してくれるようなので、黙って聞く事
にした。

「まず、本筋から言うと、あの公園でね。昔殺人事件があったんだよ」

「は？」

イキナリ全く予期しなかった言葉を言われて竜は頭が真白になる。

殺人事件？

殺し？

公園で？

浮浪者？

「殺されたのは山下 知帆。知るに船の帆で チホって言うんだよ。当時15歳だった」

「ち…チホ？」

その名前に一瞬ドキツとする。字は違うが、ウチの「チホ」と同じ名前だからだ。それで、昨晚茜は「千穂」に名字を聞いたのか…。

「竜君の妹さんと同じ名前だね。当時、知帆はとある男性と付き合ってた。1年前のあの日、彼女達はあの公園で討論になったらしいわ」

それで、逆上した男に殴り殺された。

痛ましい事件である。犯人の男はそのまま逃走して行方不明らしい。

「動機は分かっていないが、多分別れ話が拗れたのかもしれないね」

「ああ、その話だったんですか。結構騒いでいましたね。当時僕の学校でも話題になりました。美少女殺害って見出しで。とても可愛い人だったらしいじゃないですかその山下って方」

今まで黙って聞いていた小山少年も話の内容を知っているようで、口を挟んできた。

「犯人の名前は確か「矢崎 良平」でしたよね。当時１８でフリーターだったらしいですけど」

そんな事をつらつらと話し出した小山少年に、少し啞然とした様に見える茜。

「そ…そんなに有名だった？」

「ええ、僕の周りでは。そういえば親友のコメントが新聞にありましたよね。ええと確か名前は……えっ!？」

思い出すように天井を眺めていた小山が弾かれた様に茜を見る。

「火鳥…茜…。そうか、火鳥先輩だったんですね…」

「…うん。チホは私の幼稚園からの親友…。当時良く彼女の相談に乗ってたのよ」

そこまで聞いて、彼女の昨晚の反応が納得いった。親友を殺された茜。その時の彼女の心境は分からないが、悲惨だったのだろう。

「茜ちゃん…。ごめんな。俺が変な事言っただから…。嫌な事思い出させて…」

「う…う…う…チホお…」

竜が優しくそう言うのを堰を切ったように泣き出した。

「火鳥君…」

部長も火鳥の背中を叩いてやりながら、一緒に泣きそうな顔をしている。

「結局、どういう事なんでしょう?」

一人、平常通りの小山は話を続けようとしている。

「…小山君。君は人に冷たいと言われた事は無いかい?」

「はい、良く言われます。どうしてなのでしょうかね?」

本気で分からないといった顔をしている小山を呆れてみながら、茜に「大丈夫だね?」と声を掛けて気を取り直して話を戻した。

「小山君…。まあいい。草原君。問題は君がその犯人の顔を見たかもしれないという事なんだ」

「犯人を見た事?」

「そうだ。実はこの事件の犯人は、その矢崎という男とされているが、確証が無いらしい」

「そ…そんなん茜ちゃんの発言とかあるんとちゃうんですか？」

「いや、それだけなんだよ。他に彼女達が揉めているような現場を見た者が居なくて、状況証拠だけでは犯人の特定が出来なかったという事らしい」

「…うん。チホはいつも二人つきりになると人が変わったようになるって言ってた…。だから普段は仲の良い恋人達だったんだよ」

「それで、犯人と思われる人間「矢崎」は失踪。確かに怪しいが、それだけでは警察は動かない」

「なんやねんなそれっ！ 無能警官ばかりとちゃうんかつ！」

どんなに証拠が無くても、一人の少女を不幸にした男を野放しにしておくほど腐っているのかこの国の国家権力は。憤りを感じたが、こればかりは一介の高校生の力ではどうしようも無い。ただ、庶民は怒るだけしか出来ない。

「まあ、彼等が無能というより、それだけ彼女の事を知る者が居なかったという事だろう。山下さんは、友人は火鳥君。両親は居なかったらしい。そこで…。草原君。君にお願いがあるのだが」

「なんです？ 人探しとかするんですか？」

「近いね。今から守矢公園に行つて、念写して来てもらえるかな？」

「ねんしゃ…ってはあっ！？ 出来ませんがなそんなん！」

「サイコメトリーが出来れば出来そうな気もしたんだが無理か」

「出来へん出来へん！ それにそのサイコメトリー言うんのも自分から出来へんですよ？」

「そうか。残念」

本気で言っていたようだ。明らかに落胆してみせてきた。

「なら、こうしよう」

そんな事を言っておいて、部長はとりあえず現場を見に行こうと提案した。陽が落ちてからでは観察するのも支障があるという事で、今度の土曜日に現地集合するという事で決定した。

それまでに茜はESPの事について調べるといふ。小山少年は現場の付近の聞き込み調査。部長はそれらのバックアップらしい。そして竜は…

「とりあえず寝て夢を見てくれ」

寝る事が仕事なのは赤ん坊の時以来である。

部室へ行くと、布団が用意されてすぐに睡眠薬を投与されたりした。怪しい実験体のようだ。

そして気持ち良く目が覚めると決まって部員達の落胆と嘆息が出迎えてくれる。

時折、部屋に誰も居なくて、横に保科が潜り込んでいる事もあったが、それは御愛嬌。

その次の日に『新聞部部長ベツトイン？相手は噂の転校生』という「？」が異様に小さく印刷された三流週刊誌のような記事が出たりして保科を追いかけまわしたりした。

そして週末になった

草原 竜の章 第9話 「非現実」

4月9日(土)

PM1:28

守矢公園内

「では、諸君。これより不思議研究部野外調査を行う。各自作業に当たってくれ」

「ラジャー」

「了解です」

「はいはい」

「ほい」

「イエッサーボス！」

初めから部長、竜、小山、茜。

それと、普段来ない田代が欠伸混じりに答えたり、半分部員のよ
うな物な保科まで居た。

勿論、全員普段着だった。竜は青のトレーナーにジーパン。

茜は緑色のブラウスに白のシャツで、下は白パンという少しボー
イッシュな感じだった。

部長はコートに変な帽子を被っている。

小山は何故制服だった。

田代は、まだ寒いのに薄い茶色のシャツ一枚で、保科は何を勘違いしたのかゴスロリチックのドレスだった。

昨日まで聞き込み調査を行っていた小山によると、矢崎という男は仕事もせずに、一人暮らしたったそうだ。

彼が住んでいたアパートの管理人が言うには、何やら怪しい男達と付き合っていて、周囲の住人達から煙たがられていたらしい。

山下嬢と知り合った経路は分からなかったが、彼女やこの守矢公園の裏手の山にある、神社の神主の娘だったらしい。

神主らは2年前に死去。その財産と土地は親戚が引き取って山下嬢も引き取られたという事だ。

それでも、その親戚とは上手くいっていなかったらしく、彼女も数日帰らない事が多かったという事らしい。

その間や矢崎のアパートに泊まっていたのだろうか。そして、山下嬢もその頃から少しおかしかったという。

「意味の分からない事を言って時折その親戚を困らせたらいいですね」

小山が茂みを掻き分けながら言う。

一年以上経っている現場を調査と言っても、その間に立ち入り禁止になっているわけでもなく、人の入った痕跡がいくつもあった。ジュースの缶や、お菓子の袋、何やらゴム製の輪っか等…。それを拾い上げて首を傾げている茜。

「これなんだろう？ 輪ゴム？」

「あ…茜ちゃん…」

全員が溜め息をつく。

「なあ、部長こんな事しとっても何も出てこあへんのちゃいます？」
調査というより、公園のゴミ拾いをしているボランティア部のよ
うな気がしてしまう。

「そうですね。そろそろ本題に入りましょうか」

「本題？」

部長は縞模様のツバの短い帽子を被っていた。これでパイプを啜
えたら勘違いしたシャーロックホームズのような。もちろんコート
は着ていなくてただのパーカーだったが。

「その中央の木にしましょう。草原君サイコメトリーをお願いします
ます」

「はあ？」

部長はそう言って、公園の中央の一本の木を指す。

「スズカケの一種ですね。プラタナスという広葉樹です」

小山もゴミ拾い作業を辞め、公園の中央に隔離されている大きな
木を眺めながら言う。

「期待はしていませんよ。ただ、木に手を当てて念じてみてくださ
い」

笑ってそう言う部長の目はキラキラと素敵に輝いていた。これが期待していない目なら、彼はポーカーが上手いだろう。その隣を見ると、茜と小山も同じような顔をしている。保科、田代は相変らず変な顔だ。

「その馬鹿がそんな事出来るのかよ」

「あら？出来たら素敵よ。妖精も見えるかしら」

二人纏めてドロップキックを極めたい衝動にかられながら、部長に言われたように木に手を当ててみる。

自分達より遥かに長い年月此処にあったであろう木は、手を触れると少し暖かいように感じた。そういえば、木の皮の下に住む虫とというのが居るが、防寒としては相当賢いやり方だと思う。寒さを防げてしかも、根から栄養を絶え間なく送ってくれる。

春の週末。六人はただ公園の風を感じていた。木々を揺らす風の音が静かな公園を通り過ぎる。竜が木に手を当てている間、他の者もそれを静かに見ていた。

「……」

「……」

「…………」

「……何も起こらないじゃねーか」

「……黙ってなさいよ」

田代と保科だけは静かじゃなかった。

そして竜は

「……………」

何してるんやろ？

思いつきり冷めていた。

「な。やっぱりダメやで。分かったんはこの木が暖かいゆーぐらいや」

そう振り返って言おうとした。振り返ってから違和感を感じて声は実際には出ていなかった。何が違うのか分からなかったが、部長、小山、田代、保科4人がこちらを見ていなかった。

「ん？ どないしたん？」

4人の視線は竜の後ろの木に集まっていた。

「？」

疑問符を浮かべて竜も見るが、そこには別に変わった様子は無かった。ただ、先程手についてみた時と。

「なんなん？ え？ ちょっとアンタラどないしたん？？ 茜ちゃん？」

「うん？ どうしたの竜君？ ってアレ？ 部長？」

茜が部長を引っ張る。しかし、彼はピクリとも動かなかった。

「え？」

その隣の小山、田代、保科も同様に瞬きもしていない。これは

「…止まってる？」

茜の呟きに竜はハツとした。そう、時間が止まっているように4人は動かないのだ。竜と茜を別として…。

「な…なにこれ…。竜君どうなってるの！？」

「そ…そんな俺が知りたいわ！ それに何で俺と茜ちゃんは動いてるんや？」

問い掛けた答えが分かるハズも無く、茜はただ混乱したように部長達を揺さぶっている。

《き…こ……す…か》

「？茜ちゃん」

「うい？ なあに？」

「いや…茜ちゃん何か言わんかった？」

「え？ ううん。竜君には言っていないよ」

何か聞こえた気がした。

「きこすか？つて聞こえたんやけど…」

「着越すか？」

《…います…きこ…すか》

「！　またや！？　　いますきこすか？」

「ええ！？　　なーになーにい？　　なんの暗号？」

「知らんわ！　　何か聞こえたんや！　　茜ちゃん何も聞こえてへんの？」

風が鳴っているのか、ザワザワという感じな音が声に聞こえた？
そう思つて耳を傾けると「ゴーゴー」と風が強くなっていたぐらいで何も聞こえなかった。そうしている様子を見て茜は顔をしかめている。

「精神病の末期症状なのかな…」

とても小さな声で茜は酷い事を言っている。

「ん？　　草原君どうしたんだい？」

そうしていると部長達が動き出したようで、目をパチパチさせている。こちらが先程の場所から瞬間移動したように見えたのだろう。交互にプラタナスの木とこちらを見返していた。

「あ、ぶちよく戻って来たんですね！」

「…戻って？」

「なんやしらんけど、アンタラ止まっとったで？ パントマイムみたいに」

「あ？ 何言ってんだ？ アホだろお前」

「アホちゃうわい！ 蛭助お前だって止まってたんやで？」

「へっ」

こちらの言葉に失笑する田代だが、部長は頭の横を押さえている。
「なるほど。それは本格的に超常現象だ」

「え？ …ああ、サイキック収容が発生したんですね」

「ノイズはどうなったのか分からないがね。火鳥君言われた通り勉強したようだね」

「えへへ。任せてください」

分からない話を交わし出した部長と茜。良く分からないといった顔をしていると、部長がこちらを向いて笑ってくる。

「竜君は無意識にトランス状態になったようだね。そもそもESPを発揮した瞬間から時間という概念は無くなるんだよ」

「は？」

「まずは…何処から説明すれば良いだろう…。そうだね…例えば透視。目の前に壁があったとして、その向こうの映像を見る事は普通は人間には出来ないだろう？」

そして部長は手に一枚のカードを取り出した。

「これを茜君の理論を元にとすると超時間の未来、または過去にこのカードに書かれている物を見る可能性がある。それを時間と空間を飛び越えて見る事が出来るのが透視だ。…今「飛び越えて」と言ったが、実は此処に時間の概念が無いとどうなるだろう？ 知覚出来る物は、物体からのノイズ、そしてそれから発信された情報がチャネルを通して収容器に収まって、脳に伝達される」

「……よう分かりません」

竜はそう呟いたが、部長はそれを無視して続ける。

「この物体から読み取るというのがサイコメトリーだと考えるなら、時間という物の概念がなくなっても不思議では無いと思わないかい？ まあ、私は透視も、予知も、サイコメトリーも同じ物だと考えているけどね」

「はあ…」

何となくだか分からなくも無かった。実際そういう現象に身をおいたので、素直に受け入れる事が出来たのだろう。

「しかし、これはそういう能力を肯定した場合の理論で、否定した場合は過去に知っている事が、再生されただけだと思う。デジャブだね」

「ええー！部長！ そんな事言っても実際に…」

茜が批判の声を上げる。全面的に超能力の存在を信じている彼女としては当然の反応だった。だが、やはり部長はそれを聞かずに指を立てて言う。

「しかし、それを証明するものが無いだろう。私が言いたいのはどっちにしろ彼の…草原君の能力を証明するまでには至らなかったという事だ」

「そ…そない言われたかて…。俺としては…」

「デジャブを感じるような精神状態の時に、時間が止まったと感じても不思議では無いだろう。これが君の言う「時間が止まったような状態」の証明では無いだろうか」

「……」

そう言われてしまったら反論のしようが無かった。今まで起こった不思議な事は、確かに竜の心が不安定だったから起きた事かもしれない。

遠く離れた土地から来て疲れていた。

良く分からない少女と共に、暮らすようになった事での動揺もあった。

新しい学び舎には変な奴と変な部活が始まった。

そういえば今朝の母の様子もおかしかった。

それらの不安が一気に襲い掛かり、精神が乱れたとしても何も不思議が無い。自分はそんなに弱い人間では無いとは思っているが、無意識にではどうなのかは知るよしもない。

その後、一応全員でもう一度付近を調べてみたが、結局何も発見出来なかった。竜と茜だけが感じた不思議な現象も部長の弁で、証明され以後は話題には上がらなかった。

「それじゃあまた、明後日部室で」

「またな」

「またねー」

「さようなら」

それぞれが帰路に足を向けた時には既に陽が暮れていた。

P M 7 : 1 9

薄暗い公園の中で、茜と竜の二人は居た。

「じゃあね」

諦めきれずに最後まで残っていた茜も流石に暗くなってしまったので帰ると言い出した。何か気になって竜も木をもう一度触つてみたり、色んな所に目を向けてみたが、何も変わった事は起きなかった。

「ああ、茜ちゃんまたな。風邪引かんように気いつけて帰るい」

「うん。 ありがとうじゃあね！」

それでも元気良く走り去っていく茜を目で追いながら、竜も家路を辿る事にした。ゆっくりと歩き出すと、公園の入り口に人影があった。

「!?! うわあっ!」

茜の悲鳴。 見ると人影が茜に組み付いているようだった。

「!?!..こらあ! 何しとんねんっ!」

急いでそちらに駆けようとするが、その前に人影が倒れた。

一つだけ。

もう一つはすぐに走っていく。その人影の手にはキラリと光った物が握られていたようだった。

遠目からでも分かった。倒れたのは茜だ。

「茜ちゃん！」

「りゅ…ダメっ！ 追って！」

顔だけ上げて叫ぶ茜の顔が赤く汚れていた。

「茜ちゃん！？ 何処怪我したん！ はよ病院に…」

「ゴメン。刺された…くっ…。私の事はいいからはやく…早く追って！」

茜は気丈にも笑ってから、すぐに真剣な顔をして人影が去って行った方を指差す。

「あ…アホかい！ 病院行くのが先や！」

「ダメなの！ 今の…矢崎よ！」

「！？」

「早く追って！ でないと…うっ…」

「茜ちゃん！茜ちゃん！？ クソっ！どないしたらええねん…」

茜を抱き抱えながら、近くの公衆電話を探したが見当たらない。携帯電話が普及した最近では工数電話の設置数も減っていると聞か、こついう場合はそれを恨んだ。竜は携帯を持っていない。

「あれ？お兄ちゃん何してるの？」

そこに明るい声が響いた。薄暗いそこに光明が差したと錯覚したぐらいだ。

「千穂！　なんで此処におるねん！　…　つて今はそんな事言つとる場合やない！　ちよつと茜ちゃんを頼む！　病院連れてくから！」

千穂は言われて一瞬訝つたが、足元に横たわる茜を見て瞬時に状況を察してくれた。

「この人…この前の人だね…。お兄ちゃん私が看てるから早く病院に電話して！」

「分かつとる！」

— 先ず茜を千穂に任せ、公園の周りを走る。

ジュースの自動販売機がすぐに見つかるが、そこには電話ボックスが無かった。竜は焦りながらそこから見渡すが、近くに公衆電話は無さそうだ。

「しゃーない！　一大事や！」

竜はそう叫ぶと、近くの民家のインターホンを押す。

「すみません！　すみません！　怪我人が！　電話貸してください！」

インターホンの音が掻き消えるぐらいの音量で叫ぶ竜。その内インターホンから「はい？」という声がして、竜はまた激しく叫んだ。

「すみません！ 電話貸してください！ 友人が大変なんです！」

熱を上げる竜の音量が納まるのを待ってから、インターホンの声は落ちていた声で

「はあ？ 訳分からない事言ってるんじゃないわよ！ 警察呼ぶわよ？」

「怪我人や！ 警察でも何でもええから呼んでくれ！」

「怪しい訪問販売だったら間に合ってます！」

「ちょ… ちよつと！ アホかこんな時にそんなんあるかい！」

「……………」

苛立つて抗議するが、それきりインターホンから何も聞こえてこなかった。

「…なんやねんっ！ ホンマこつちのモンは薄情なんばっかりかいっ！」

勢い余ってインターホンを殴り壊したくなったが、此処で本当に警察にお世話になったら手遅れになるかもしれない。そんな事を考えながら竜は元来た道に戻る。

「茜ちゃん携帯持つとるやろか…」

近くに公衆電話が無かった時にまずそれを確認するべきだった。己の無能さを恨みながら、竜は公園の前まで戻った。

「お兄ちゃん！ 救急車は何時くるって？」

千穂はこちらの姿を確認すると、すぐに聞いて来た。竜はそれに手を振って答えて茜の側に座り込む。

「？ お兄ちゃん？」

すぐに茜のスカートを触ってみる。何も硬い物は無い。

「お兄ちゃん！？ こんな時にセクハラ！？」

「ちやうわい！ 携帯探しとるんや！」

「携帯？」

「ああ、千穂も探せ！ 近くに公衆電話無かった」

「う…うん！ ……って電話？」

女には隠す場所が一杯あるのよ？

そんな保科の言葉を思い出した。特にカバン等を持っていない茜に、携帯を入れる場所はスカートのポケットか上着のポケット以外思いつかなかった。それ以外にポケットは無い。それ以外に隠す場所と言えば…。

心持ち膨らんだ二つの胸の間とか…。

「そんなトコにあるわけないやん！」

自分で突っ込みながらも、カッターシャツのボタンを上から外す。4つ程外すと、茜の白い肌と下着が露になった。そこで気付いたが、腹部を刺されたようで、それより下半分は血で汚れている。

「お兄ちゃん！ 何してるの！」

茜の胸元に手を入れようとした時、何か硬い物で千穂に殴られる。

「こんな時に何してるんだよ！」

「ち…違うわい！携帯隠してないかと…」

「そんな所に隠すのはどっかの怪盗だけだよ！」

「不〇子？…って千穂それ！？」

何か硬い物だと思ったら、千穂の手には携帯電話が握られていた。

「うん？ ああ、これ私のヤツ。持ってたの忘れてたよ」

「あほおおお！ はよ出さんかい！」

竜は急いで千穂の手からそれを奪うと、病院に電話する。

それから15分程で救急車が到着。竜と千穂も乗り込んで、茜はすぐに車内で応急手当を受けて、近くの病院に運ばれた。

草原 竜の章 第10話 記憶

P M 7 : 4 9

神葉病院

そのまますぐに手術室に運ばれる茜。

「ご家族の方？」

手術室の前で待っていると、少し老けた看護婦が現れて、心配そうにこちらの顔を覗き込んできた。

「いえ、友人です」

「そう。貴方も酷い顔よ。少し横になった方がいいわ。ウチの海洞医師は優秀な外科医だから安心して」

そういうと看護婦は優しく微笑んで、手術室の近くにある待合室の椅子に毛布を持ってきてくれた。千穂の方はわりかしと元気で家に電話しているようだった。

「お兄ちゃん。お母さんが学校に電話して聞いて、茜さんの親御さんに連絡してくれるみたい」

「そっか…。千穂もお疲れ…。ありがとうな」

横になりながら礼を言う。あの状況で取り乱さずにいてくれた千

穂に心から感謝した。見た目は少し抜けているように見えたが、意外にしっかりしていたのには驚いた。

「ううん。言ってなかったけど、私、茜さんは前から知ってるから」

「ん？ そうなん？」

「うん。友達だったんだよ。昔ね」

「…そう…なんか？」

数日前に二人が対面した時にの茜の反応を見ると、どうも面識が無いように感じたが、千穂がそう言うのだからそうなのだろう。本人も忘れているのかもしれない。

「茜さんはね。ずっと、あの公園に来てたんだよ。一年間毎日…」

「ふーん」

聞きながら疲れが出たのか眠くなってきた。欠伸混じりに耳を傾ける。

「あの日からずっと…茜さんは自分を責めているんだよ。チホを止めれなかったのは私のせいだ！って…」

「ああ、お前と同じ名前の子が亡くなったって事件のヤツな。聞いたで」

「……うん。同じ名前……。お兄ちゃん……。ううん。竜さん。変な事言うようだけど…」

「ん？」

急に呼び名と口調が変わったので、眠い目を擦りながら体を起こして千穂をに向き合う。

手を揉みながら、千穂は下を向いていて前髪で顔が見えないが、口元だけ見えた。

「私が死にそうになったら…茜さんみたいに助けてくれる？」

「は？ 何をいうとんねん？」

こんな時に何を言うのだろうか。呆れた声で聞き返すと、千穂は唇を噛むようにして、もう一度聞いてきた。

「助けてくれないの？」

「……冗談はやメえ。そんなん考えたくあらへん」

「で…でも…」

「ええか。千穂。お前はもう家族やで？ なんでこうなったか理由はわからへんけどな。初めて会った時な、あの時お前に会って新しい土地で暮らすっていう不安が少し薄れたんや。そして、今日こんなに頼りになってくれたんや。お前はもう家族やし、友達や」

正直な気持だった。素性の知れない彼女と出会った事は少し不安だったが、彼女が自分を無条件に慕ってくれた事、家でも、学校でも少なくとも一人じゃない事。

不満は無い。感謝の気持は一杯ある。

自分の事を兄と呼ぶ事も完全に了承した。

「そつか…ありがとう…」

「…なんでそんな事聞くねん。照れくさいやないか」

実際照れて、毛布を頭から被った。

「それじゃ、全部話すね」

静かに呟く千穂。

「全部？」

毛布に包まりながら声だけ聞いていた竜は、その声の真剣さに余計に毛布から出れなくなってしまった。

「あのプラタナスの木はね。ずっと昔からあそこにあるんだよ」

「は？ 何言つて」

イキナリ木の話をした千穂に訝って、意味が分からなかったので聞き返すが

「聞いて！」

「はい！」

激しく言われて黙るしかなかった。

「木はね。色々な思いで育つんだよ。早く大きくなって欲しいという思いに葉を揺らして答えたり、悲しい事があつた時は優しく微笑むんだ」

「……」

何を言っているのか分からなかったが、千穂の声は今にも泣き出しそうに震えていた。

「ずっと…見てたよ。茜さんが泣いているのを…。でも、私は動けなくて…。慰める言葉も知らなくて」

「…私は？」

千穂はその声に答えず続ける。

「チホさんが…死んだ時も私は見ているだけだった…。何も出来ずに…。動けない事が、こんなにもどかしいと思ったのは初めてだったよ」

「千穂…お前まさか…」

「うん。私は木…プラタナスの木…」

「……」

静寂の中に千穂の声だけが響いた。

時間軸不明

「チホ…何で死んじゃったの…」

「……………」

「私達親友だったでしょ？どうしてちゃんと話してくれなかったの…。ううん…ちゃんと私が聞いてなかったんだよね…」

「……………」

「矢崎は逃げたって…。それ以外は分からないのゴメンね…」

「……………」

「チホ…私どうしたらいいのかな…。貴女が居なくなっって一人ぼっちで…どうしたらいいのかな…」

「……………」

「うん…。友達出来ないのは私が悪いんだと思う…。でも、どうしても友達出来ないんだよ」

「……………」

「オカルトってそんなに気持ち悪いかなあ…。私は私だよ…」

「……………」

「チホ…どうして死んじゃったの……………」

「……………わたしはここだよ」

「チホ……………わたし…」

「……………ここに居るんだよ」

「私も貴女の後を追うね……………」

「……………ダメ！アカネヤメテ！」

「私なんか生きていても仕方無いもんね…チホ…今いくから…ね」

「アカネダメ！」

「…え？」

「アカネダメだよ…。私は此処にいる…。ずっと貴女の側に居るから…」

「チホ？…チホなの？」

「ウン。ずっと一緒だよ。私は目の前に居るよ…」

「目の前！？ 何処！チホ！」

「目の前のその……プラタナスの樹に……」

草原 竜の章 第11話 樹の願い

4月11日(月) PM0:25

神葉病院・103号室

「……ん……。ここ……は？」

私が目を明けると白い天井が見えた。

「?…病院？」

そこは個室の病室のようだった。自分を見ると点滴のチューブや呼吸器等がいくつも繋がっていた。

「お。茜ちゃん目覚めたんか？」

「あ！ナースコールするわ！看護婦さん」

「え??？」

ベットに横たわったまま横を見ると、竜君とちゅちゃんが椅子に座って何か言っている。頭がまだ朦朧として良く分からなかった。ちゅちゃんはナースコールが何処にあるのか分からないのか、外に出ていってしまった。多分、私のすぐ後ろにあるのに…。

「茜ちゃん二日間目覚めんかったんやで？まあ良かったわ」

「2日…間？」

呼吸器が邪魔で上手く発音出来なかった。しかし、竜君はそれをちゃんと聞き取ってくれたみたいで、ウンウンと頷いている。

「そうや。…これもチホのおかげやな…」

「チホ？」

「ああ、チホ言つてもウチのチホやけどな」
 そういつと竜君は少し寂しそくに笑つた。

「茜ちゃんが集中治療してる時の話なんやけど……」

竜君は何処か遠くを眺めるようにして語った。

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

語り終わるのを待たずに私は、呼吸器を外して点滴の針も抜いた。

「茜ちゃん!？」

「竜君。心配かけてゴメン。もう大丈夫だよ」

呼吸器を外して少し苦しかったし、針を外した所から出血してるけど、私は寝ていられなかった。

「よっ……わっ！」

ベットから滑り落ちるように降りると、スリッパを履いて外に向かおうとしたが、すぐに足に力が入らなくて倒れてしまった。

「茜ちゃん！？ムリしたアカンって！血い一杯抜けたんやから！」

「でも！…私行かなきゃ」

竜君は私を支えてくれながらベットに戻そうとするけど、それを押しのけて私は言った。

「公園へ…守矢公園へ…竜君お願い…連れて行って…」

「…チホちゃんの所やな…分かった。いこか！」

竜君は分かっているみたいだ。良かった。

「ゴメンネ…」

そうして竜君の肩を借りながら、私達は守矢公園へとゆっくり歩き出した。

P M 1 : 1 5

守矢公園

引きずられるように竜君に運ばれながら、私達はやっと公園に着いた。殆ど背負うようにしてくれたので、竜君は大分息が切れていた。ありがとうね、竜君。

「チホ…」

いつの間に切られていたのだろうか？

そこにあつたプラタナスの樹は切り株になっていた。

私はそのプラタナスにすぎるように抱きついた。

「貴女にまた…助けられたんだね…」

「千穂…」

竜君がもう一人の「チホ」の名前を呼んでいるようだった。

4月9日(土) P M 8 : 5 1

神葉病院・待合室

あの日、茜が手術室に居る時の話だ。

森川千穂は告白した。

自分が人間では無い事を。

そして、自分が木の精で、茜の友人のチホの記憶を読み取って実体化した事を。

茜はあの日、とても危険な状態だった。そして、手術室で…一度死んでしまった。

しかし、それを救ってくれたのが「千穂」さんらしい。彼女の生命力を全て使って…「奇跡」を起こした。

「竜さん…。私は茜さんが助かるなら命は惜しまないよ。…元々…無かった命なんだから…」

「千穂！ でも！」

「折角竜さんとも仲良くなれたのに…ちょっと残念だね…あはは」

「千穂！」

竜は毛布から出る。…しかし、そこに居るハズの千穂が見えなかった。

いや、半透明で確かにそこに「居た」

「竜さん…生まれ変わりって信じる？ ……今度生まれ変わったら人間がいいな…」

「ああ！ 千穂は今でも人間やん！ 何言ってるねん！」

竜は涙が流れるのを構わず千穂を抱き締めようとするが、その手は空を切ってしまう。

「…ありがとう…。竜さんお願いがあるんだよ。最後のお願い」

「…なんや？」

涙をトレーナーの袖で拭って見上げた。

「生まれ変わったら…友達になってね」

そっぴい終わると…。千穂の体は完全に消えてしまった。

「…それは違うで千穂…」

誰も居なくなった部屋で一人、冷たい床を叩いて崩れる竜。

「生まれ変わってもや……………それに…竜さんやなくて、俺はお前のお兄ちゃんやで…」

その1時間後、茜の手術は無事終了し、後は彼女の生命力に掛けるという事になった。

4月11日(月) PM 1:35
守矢公園

「信じられないよね…」

「そやな…」

プラタナスの木の切り株に二人は座り込んだ。

「チホ」への礼を済ませて急に疲れが出ってしまったので、2人共後数分は動けない感じた。

「結局何だったんだろうね…」

「…全部夢やったんとちゃうか？」

「夢？」

茜は自分のお腹に巻かれている包帯を指差して笑う。

「これが？」

「……」

「矢崎には逃げられたんだよね。ちょっと口惜しいなあ」

「そやな…でも命あつてのモンや。一応警察に届けたんやから、後は捕まってくれるんを願うだけやな」

あの日の後、竜は事情聴取を受けた。顔は見えていないが、被害者の証言　茜の証言　を元に調査をしてくれるらしかった。一度逃げられているので何処まで信用して良いか分からないが、素人が口を出す事は出来ないので仕方ない。

「でも…夢だつたら素敵な夢だよね」

「怪我してて素敵もなんもあらへんやろ」

「これはこれだよ。チホと会えたんだから私は満足だよ」

「チホ…か…」

森川千穂、いや、山下和帆との事は、竜と茜二人の思い出となった。風が吹いても消える事の無い、大事な思い出と…。

「生まれ変わっても友達になるって約束したんやチホと…」

「そう…」

プラタナスの切り株。あの日を境にこの木は枯れてしまった。そして役場の者が、腐って倒れる前に切ってしまったらしい。

「生まれ変わるんやつたら早よしてほしいなあ。お爺さんなつてからやったら遅いで」

「何言ってるんだよ。竜君。生まれ変わりつてすぐに何処かで産まれてるんだから、もう0歳だよ」

「そ…うなんか？」

「そつだよ。10年もすれば何処かですれ違つかもしれないね」

「……10年か…」

その頃の自分を思い浮かべてみる。きっと就職して頑張って仕事しているのだろう。この町に居るんだろうか？

出来ればこの町で就職したいと思う。竜はこの数日でこの町が好きになっていた。

《…ますか》

「…ますか??」

「うん？ どうしたの竜君？」

風がざわめいていた。

「いや…何か聞こえたような気がしたんやけど…」

《き…えないの?》

風が急に強くなった。その風が木々を揺らし、ザワザワという音が強くなった。

「…聞こえたで…」

「ん？ ん？ どうしたのホントに？」

茜は首を傾げているが、竜には分かった。風が葉を揺らす音…、それは「声」に聞こえたのだ。

《よかった…。聞こえたんですね》

「ああ、よう分からんけど誰や？」

「え？ ええっ？ 誰と話してるの竜君？」

《私は…今貴方達が踏んでる木です》

「わつつつ！？」

驚いて飛びのく竜。そのまま茜も手を引いて立たせる。

「わわ？ 何？」

《すみません。ええと、貴方達の彼女への思いを受け止めました。これを授けようと思ひまして》

木 切り株 は少し緊張感の無い声でそんな事を言ってきた。

「さずける？」

《手を出してください》

「手…」

竜が言われた通り手を出すと、その上に一枚の葉が現れた。

「ええっ！？ 何何？ 竜君マジック？」

茜には全く「声」が聞こえていないようで、終始竜の奇行に驚いている。

「葉っぱ？？」

《それを使えば…「彼女」は戻ります》

「っ…使ういうても…ゲームちゃんやから…」

《…それを、持って祈って下さい…》

「祈る…」

「ねえねえ！ 竜君！ 精神病の末期症状なのは分かったからどうしたの？」

酷い事を言われて流石に茜の方を向いて説明する。

「今座つとつた木がな、コレ使えばチホが戻ってくる言っんや」

茶色い今にも崩れそうな枯葉を振り、茜に苦笑してみせた。

「えっ！？ 木の声が聞こえたの？」

「祈ったらええらしい…茜ちゃん」

「む…竜君騙したな！」

茜は頬を膨らませて拳を挙げてきた。

「いやっ！？俺やなくてその木に言うてくれや！俺知らんてっ」

「そんなのに言っても、私は反応分らないよっ！」

もっともだ。

「ケンカしちやいけないよ」

「そ…そうやで！千穂の言う通りやケンカはアカン！……え？」

「……」

「お兄さん達ケンカしちやだめだよ。…ふえ？どーしてこっち凝視してるの？」

声がした方を見ると、少女が居た。見た感じは普通の少女で髪型も普通のストレートだ。

「チホ…？」

茜は目を丸くしてその少女を見る。しかし、千穂とも和帆とも似ていなかったようで、すぐに溜め息をついた。

「…じゃないみたいね。貴女だれ？」

「ええ？ 私は私だよ。名前は……アレ？ なんだっけ？」

少女は腕を組んで必至に名前を思い出そうとしている。

「は？」

「うーん。思い出せない……。でもお兄さん達は覚えてるんだけど……あれ？ 何処であつたんだろ？」

なるほど。彼女はやはり「生まれ変わり」なのかもしれない。自分の事は分らないが、竜達は覚えているという。この娘は「チホ」の生まれ変わりなのだ。

「何処に住んでも分からへんねんな？」

「ふえ？ うーん……そういえば私何処から来たんだろ？ はにゅう……」

「茜ちゃん。この娘やっぱり生まれ変わりみたいやな」

「え？……なるほど。そっか」

茜も得心したように、笑顔を少女に向ける。姿形は違うが、この娘は二人の大事な思い出の結晶だ。

「それやったら記憶戻るまでウチ来たらええよ。ウチ家の部屋空いとるから大丈夫や」

千穂の部屋が空いている。母にはどう説明するか悩んだが、どうにかなるような気がした。

「ええ？ 竜君大丈夫なの？」

「ああ。千穂は前からウチの家族やからな」

「でも…姿違うんだよ？」

「なんとか…なるやろ」

娘を得た時の母の顔を思い浮かべると、上手くいきそうな気がする。

「ええと？…いいのかな？」

少女もとまどいながら、しかし、記憶が無いが、何故か知っている者の側に居る事を望んだようだ。照れながらも竜の手を取った。

「ふつつかものですが、お願いします」

「あはは。調子良いねこの娘」

「そやな　しかし、名前無いと困るな」

「あつ！それ考えたんだけど、薫でいいよ」

「カオリ？」

「うん。においたおやかな薫」

「よう分からんけど、それでええんやったら…。ほな、薫行こか」

「うん」

「あ…竜君。私も病院に戻るね。一応抜け出したから怒られそうだけど」

「あ、大丈夫なん？」

「うん。大分落ち着いたから一人で行くよ。じゃあまたね」

茜は足取りがやはりフラフラしていたが、倒れるような事は無かった。その足取りは何か吹っ切れたようにしっかりしているようにも見える。清々しく空は晴天だった。

「ふう。ほな行こか…」

その後姿を見送ってから改めて薫の手を取った。

「うんうん。おねがいしまあす」

手を取られても全く嫌な顔もせず、薫は逆に笑顔で握り返してきた。

「ほな、行くわ…またな…」

「？誰に言っただの？」

「気にせんでええ」

竜達が去った後の公園。一陣の風が吹いて、その風は声となる。

《私の子を…よろしく…竜さん》

草原 竜の章 第12話 春の終わり

P M 2 : 1 6

草原家

「了承します」

「は？」

家に帰ってきて、母の顔を見たと思ったら、イキナリ母はそんな事を言った。

「その娘行く所が無いんですよ？ 見た瞬間に分かったわよ。千穂も居ないし特に前と状況は変わらないでしょ？」

「あう…ええと、よろしくおねがいします。薫と言います」

薫がぺこつと頭を下げた。その頭を撫でて母は優しい声で「はい」と言って笑っている。

「ちよう…ちよう待ってや？ なんでオカン千穂おらんかったって知ってるねん。それにこの娘が行く所無いって分かるんや？」

竜は当然の疑問を母にぶつける。

そういえば、今思い出したが、千穂の時も母はすぐに状況を察したように家族に迎え入れた。

「…貴方ももう知ったんでしょうけど、私は初めから知ってたって

事よ」

「はい？ オカンそれはどういう」

「ほらほら、薫って言ったわよね？ 記憶が戻るまで貴女はこの家の家族だからね」

竜の問いかけに母は一瞥だけすると、薫を抱き締めた。

「は…はううゝありがとうゝお母さん」

「あらあら情報処理が早いわねゝ。頭の良い子は好きよ じゃあ、先にお風呂にしましょうか、洗ってあげるわ。貴女ちょっと臭いわよ」

「ええ？ …あゝうちよつとドロ臭いゝ」

「そうね、じゃいきましょう」

母は何故かとても嬉しそうに薫の手を引いて浴室に向かう。

「…ちよう！ 俺放置！？」

「放置」

それだけしか答えが返ってこなかった。

流石に浴室まで行くわけもいかず、竜は訳の分からないままその場で頭を抱えるのだった。

4月15日(金) AM7:45
神葉町

「あの日」から4日後

「おにいちゃー！ー！ー！ー！ん！」

春の町並みに元気な声が響き渡る。

「ん？」

その声に振り返って、欠伸混じりにその姿を確認して、竜はまた歩き出した。

「ああゝ！ 無視！ おにいちゃん！ 先に行くし、無視なんて…私の事嫌い！？」

元気に走って来るが、あまり二人の差が縮まらない。竜は早足で歩いているからだが、それでもその者の足は遅かった。

丁度守矢公園の前まで来て、竜は伸びをして立ち止まった。そこには桜の木が、風に揺られて花びらを舞わせていた。足元はピンク色の絨毯のようになっている。

「花は散るから美しい…なんて言うのもキザだな」

ふと気になって、入り口の方からプラタナスの切り株を見る。昨日見たままの姿でそこにある切り株を眺めてから、後ろを振り返ると、少女がやっと追いついたようで、肩で息をしながら座り込んでしまっていた。

「ふうふう…はーやーいーよお…」

追いついた少女はあからさまに頬を膨らませて抗議した。

「花は散るから美しい。とか言うけどそれは「みている人の主観」で、散ってる方にすれば美しいなんて言ってるんじゃないよ？」

「……」

「ん？何見てるの？お兄ちゃん？」

返事が無い事に訝って、竜の視線を少女も追った。そこには切り株がある。その少女が生まれた場所だ。

「…よくおぼえてないけど…。私あそこから出てきたんだよね？」

「ん？…ああ、そうやで薫」

千穂の生まれ変わりの少女は、やはり千穂と同じ年らしかった。生まれ変わったばかりなので0歳なのかもしれないが、見た目からして大体15ぐらいだと母が言っていたので、やはり同じ学校に通う事になった。

学校へ行くと、不思議な事に誰も「千穂」の事を覚えていなかった。そしてやはり薫の担任は下々原 美奈先生だった。

これはどういう事だろう？ 矢崎の事件は、流石に傷害事件として、警察が、今も追跡中みたいだが、それ以外のフシケンの野外調査の事等誰も覚えてなかった。

茜と竜以外は…。

「ねえねえ。お兄ちゃん」

「なんや？薫」

「伝言」

「伝言？」

「うん。伝言ええと言つよ？」

「うん？」

「ありがとう だって」

そう言つて薫は今度は一人で元気に掛けて行つた。

「……………」

声も出せずに涙がこぼれた。

「こちらこそや…ありがとう…千穂…」

そうして、竜は涙を制服で拭くと顔を上げて歩き出した。

季節は春。これから暖かくなっていくのだろう。

俺は一人じゃない。

これまでも、これからも…ずっと心の中に彼女が居るのだろう。
そして薫が、茜が、田代が、
部長が、小山が、保科が…。

竜の不思議な事件は始まったばかりである。

草原 竜の章 エピローグ

春の日差しを受けて、青々と茂る木が一本あった。

その名はプラタナス。

どこにでもあるような木だ。

木は一人の少女の少年の出会いを彩った。

木は感謝した。

その出会いを大切にした少年を。少女を。

木は二人の少女と少年の悲しい別れを彩った。

木は一人の少女と少年の再会を彩った。

木は喜んだ。やはり出会いを大切にした者の心に。

ずっと木は待っていた。人との触れあいを。

何故だろう？

寂しかった？

うつん。

何故だろう？

憧れたんだよ。

何を？

人の心に憧れたんだよ。

何故？

ずっと悲しそうに泣いている少女の心に触れたから。

何故？

ずっとその少女を思う私を知ったから。

誰の為の奇跡だったの？

奇跡？

奇跡でしょ？

そうなのかもね。

やっぱり夢？

夢かもしれないね。

覚めてしまうの？

それは貴女次第。

うん。 そうだね。

大好きな人が出来たから。 それだけでも良いんだよ。

そうだね。

じゃあ、またね

うん。

私の子をよろしく

私の子もね

うん。 わかったよ。

〃

~~~~エピソード~~~~

「で、結局どうなったの？」

不思議研究部の部室で茜と竜は居た。

「なああんも分からへん」

「何だよそれえ」

「何だよって言われても説明出来へんやろ流石にこんな変な事……」

「そんな事言ったら今回の発表どうするの？不思議事件だよ？立派な」

「……茜ちゃんは公表したいんか？」

「……正直迷ってる」

「ほらな。ええやん一つぐらい分からへん事あっても」

「そんなもんかなあ？」

「そんなもんやろ？」

「じゃあ、今回はこれでこの事件は終了って事だね」

「今回は…ってそんな何回もあっても困るんやけどな…」

「へへ言っただでしょ？此処ら辺一体はパワースポットに」

「もうええて…」

竜は心底疲れたようにテーブルに突っ伏した。

「それじゃ、次回は海かなあ〜」

茜が何か言っているのを聞き流しながら竜はそのまま眠りに着いた。

【プラタナスの樹に… 草原 竜の章 完】

『わたし…まだきえたくない…』

t o b e c o n t i n u e . . .

## 草原 竜の章 エピローグ (後書き)

これにて終わりです。

続きがありそうな終わり方ですが、基本的には無いです。

他の作品など <http://19922.at.webry.info/> にて公開しておりますのでよろしかったらお願いします。

ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7094d/>

---

プラタナスの樹に...

2010年10月28日06時57分発行